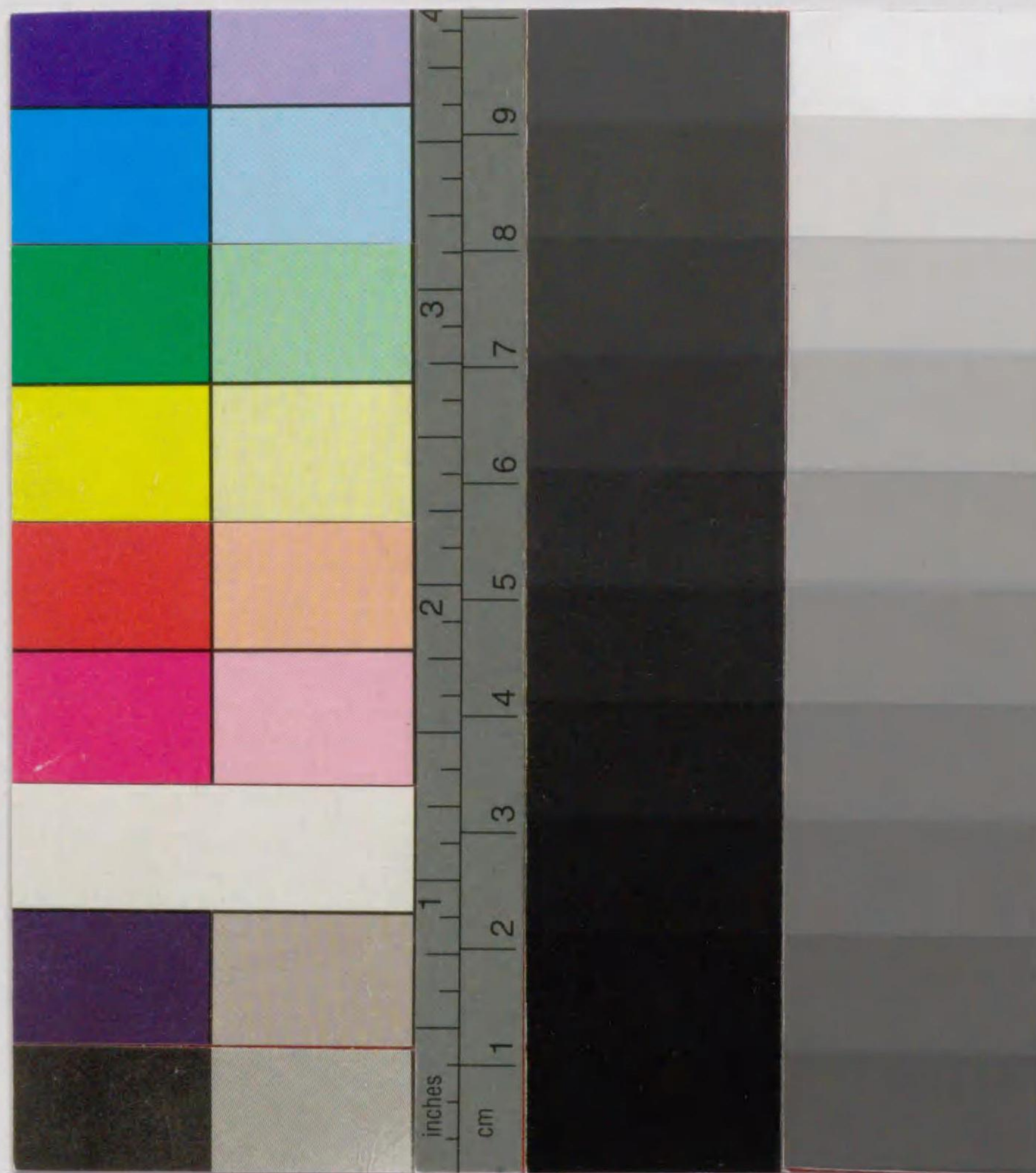


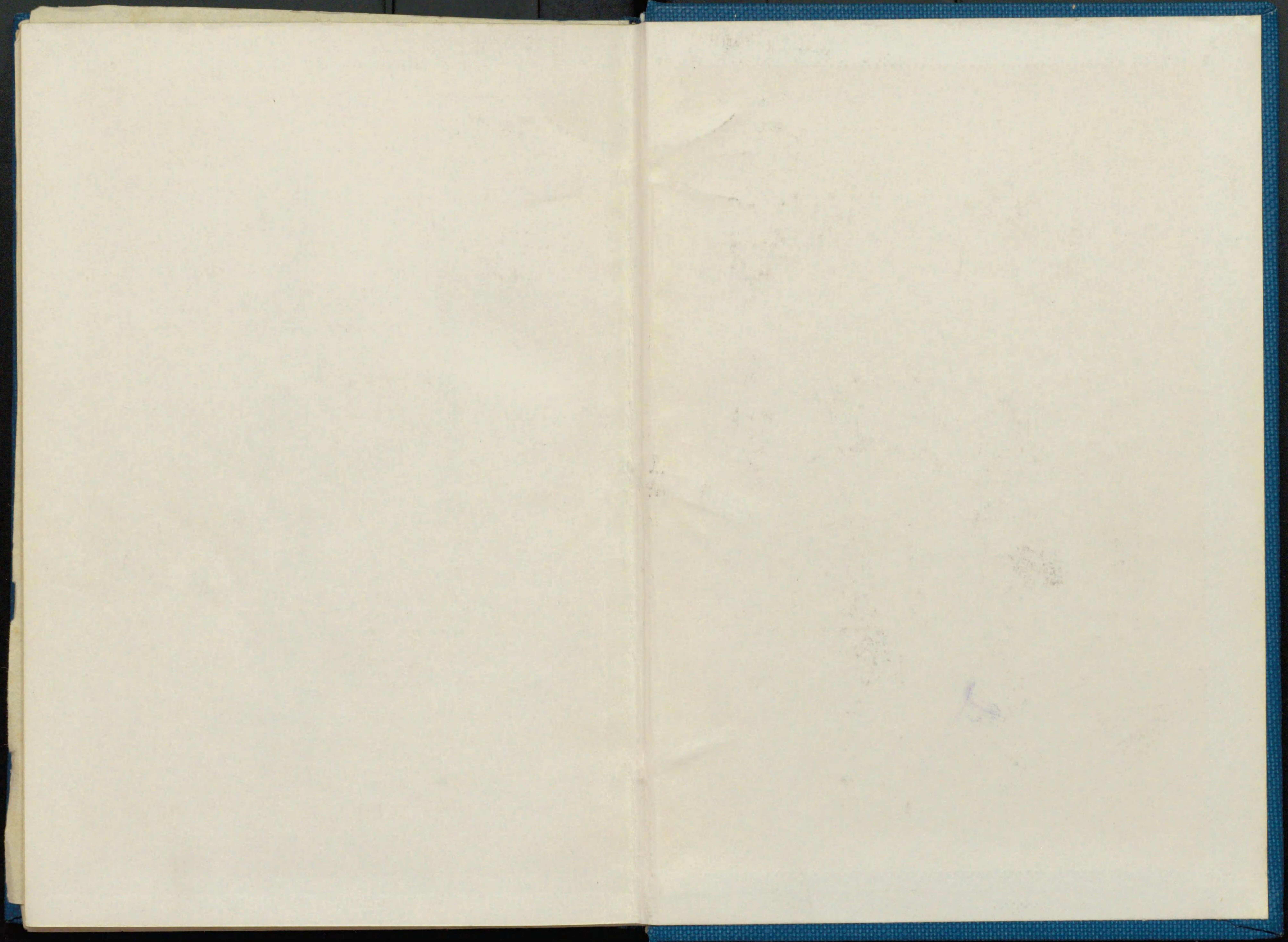
578-240



1200501520740

578
40





470

納本



日家裁役秘録



子樞密顧問官
爵

金子堅太郎閣下講演

東京

博

文

館

版



下閣郎太堅子金 官問顧密樞子

四十餘年辛苦誰能化爲醉夢碧雲飛人生
何恨不如此身散作他日一秋梅

甲辰三月四日 日暮交陳破洞廟法不寐 伊魯公推余說漢宋
學要熱誠顯勳乃法意赴筆不絕少公示此待仍次韻却呈

樽俎折衝世寸竒仁川海上破丸飛半郭
孝生回學外於梅正氣如新機

梅

溪石堂





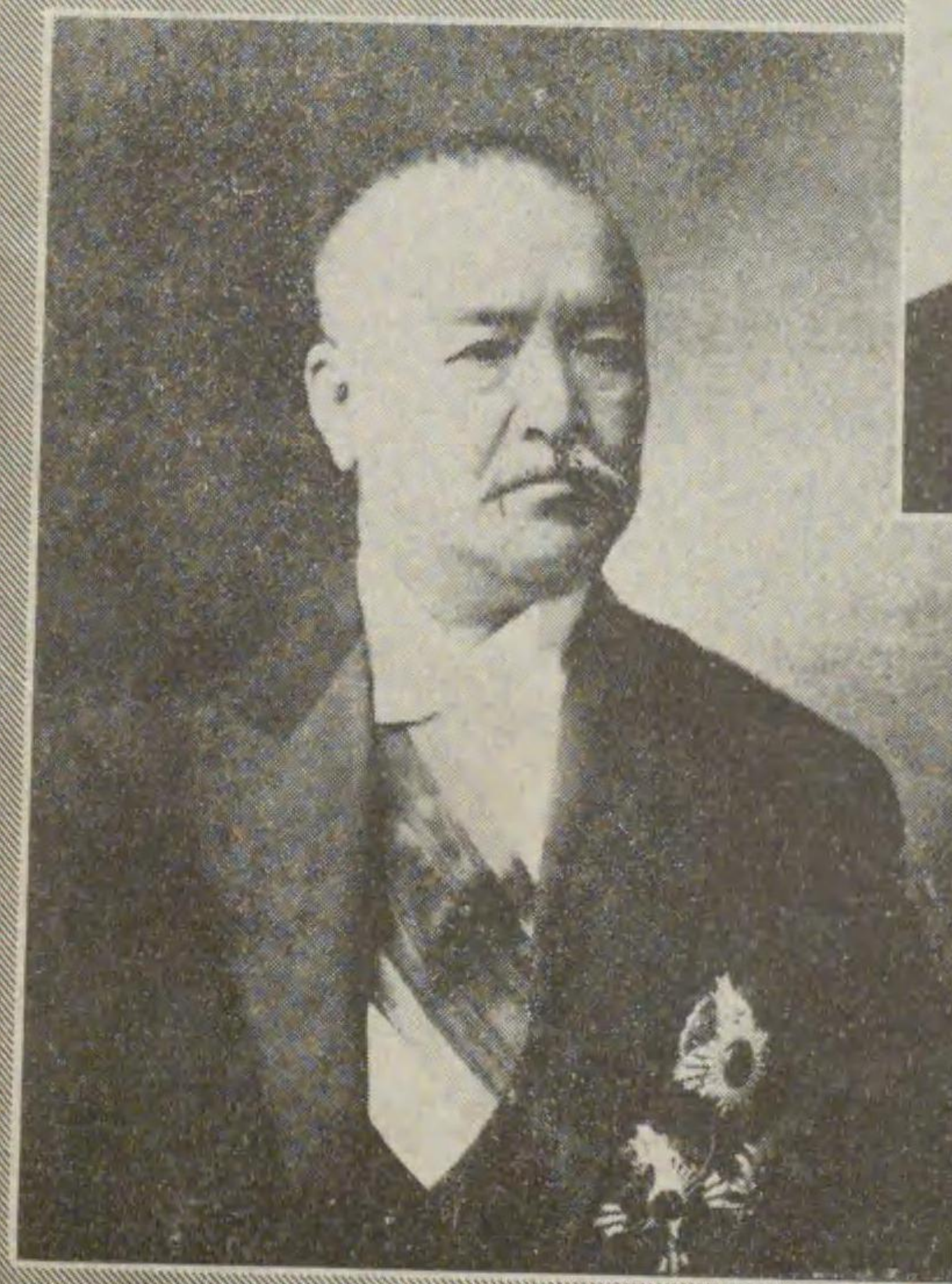
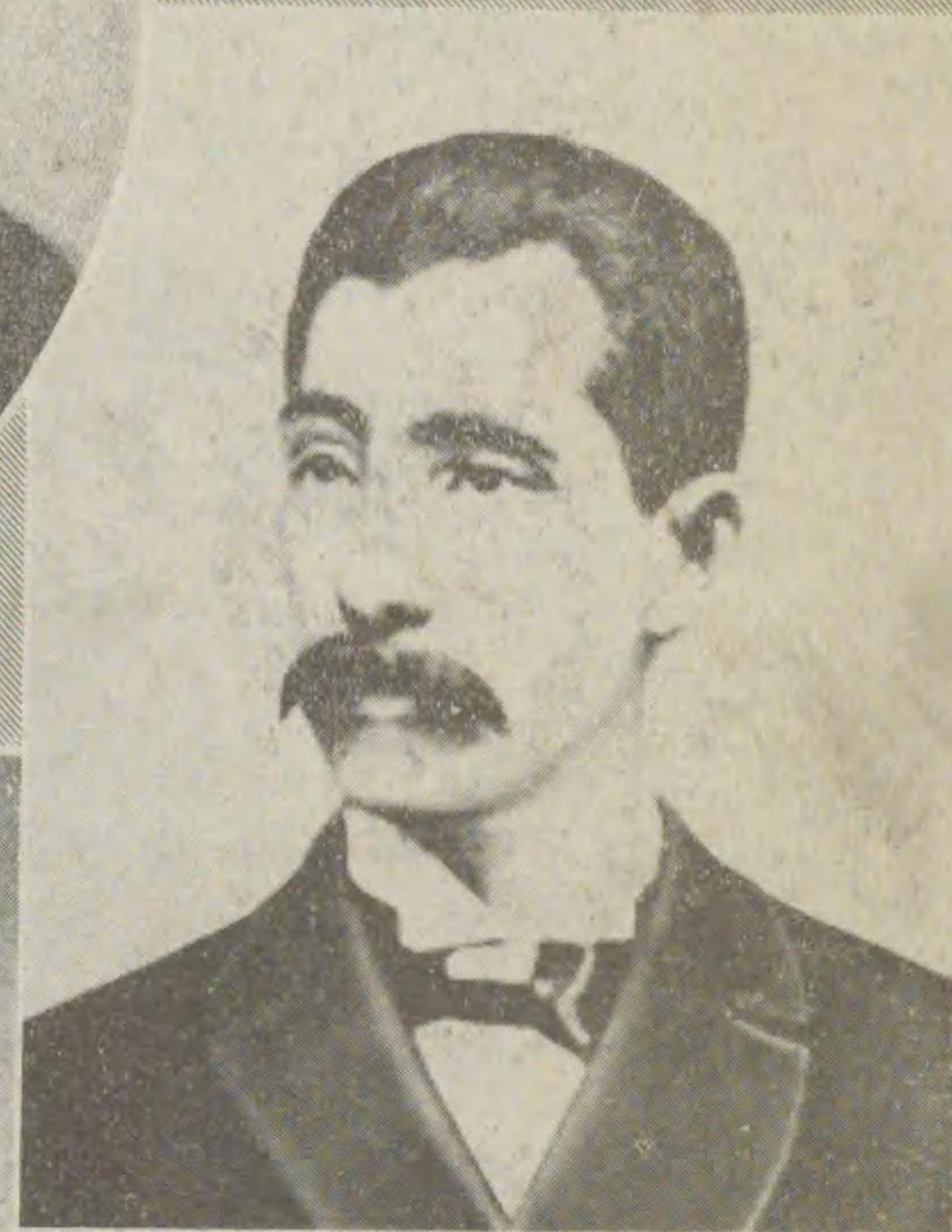
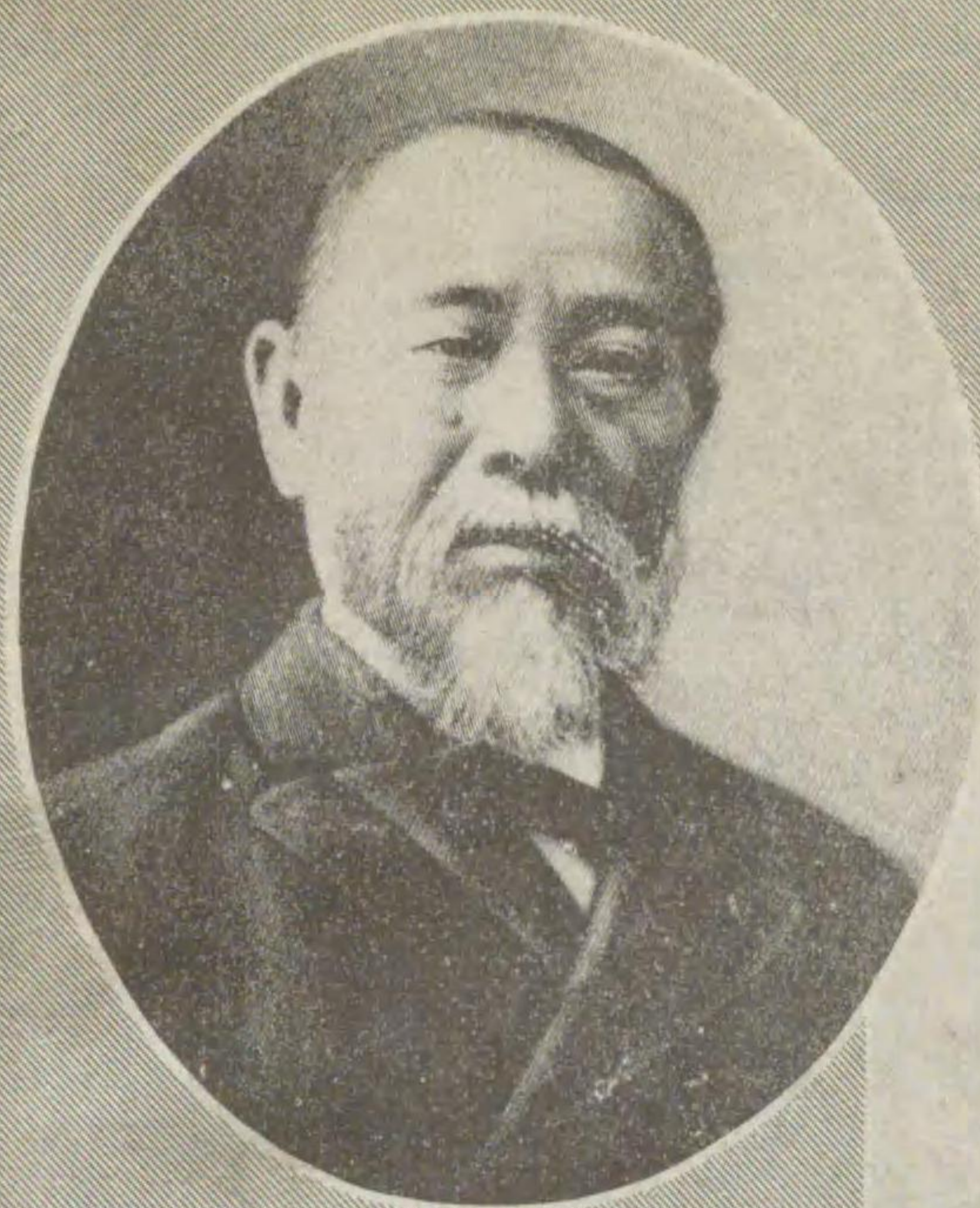
To
Baron Kentaro Kaneko
with the regards of his friend
Theodore Roosevelt
March 20th 1905

旅順開城に於ける木ノ上ノセツル電報の中





下閣朋有縣山爵公帥元(下)下閣義正方松爵公(中)下閣馨上井爵侯(上)



下閣郎太桂爵公(下)下閣郎太壽村小爵侯(中)下閣文博藤伊爵公(上)

578-240

578-240

序

日露戦争は東洋永遠の平和を保持する爲めに、已むを得ざるに出でた正義の戦であつた事は言ふまでもありません。

金子子爵は、開戦の當初政府の内命を帯びて、米國に赴かれ、或は講演に依り、或は言論機關を通じてよく我が國の事情を米國民に知らしめ、特に親交厚かりし、米國大統領ルーズベルト氏と共に、開戦の當初より平和克復に至るまで身命を捧げて盡された功績は、國民の忘るゝ事の出来ない所でありますが、其の詳細の事情は、未だ之を知るに由無かつたのであります。幸ひに、本年前後三回に亘り子爵の講演を御願ひ致しましたので、子爵の

序



下閣毅正内寺爵伯帥元(下)下閣郎八平郷東爵伯帥元(中)下閣衛兵權本山爵伯(上)

御承諾を得て其の筆記を刊行する事に致しました。

茲に、本書を廣く頒つ所以のものは、一に我國現時の世想を憂ふるの餘り、靜に思ひを二十年前に致し、かくまで、我國威を世界に宣揚し得たる、日露戦役に於て、皇室を尊び、國家を愛する、我が國民が、臥薪嘗膽舉國一致奉公の誠を盡した、意氣を偲び、世道人心の衰頹を救ひ、健全なる國民精神の振興に資せんとする至情に外ならぬのであります。

幸にして汎く同憂の士の賛同を得ば、誠に本懐の至りであります。

昭和三年十一月

田中藏六識

目次

題

筈

樞密顧問官
金子堅太郎閣下

金子堅太郎閣下

第一回 日露戦役の回顧

第二回 日露戦役當時に於ける我邦内外の事情上

第三回 日露戦役當時に於ける我邦内外の事情下

閉會辭

謝辭

第一回

日露戦役の回顧

日露戦役の回顧

第一回

諸君。私は今日講演を致します前に、一言皆さんに御託をしなければならぬことがあります。去月二十七日に、豫て東京府知事及學務部長から御招待を受けまして、此席に於て諸君に日露戦役の回顧談をする御約束をしまして、午後二時に御集りになると云ふことも、承知致して居りました。所が急に緊急勅令案に對し御前會議が開かれると云ふ通知を受けまして、午前十時に參内致しました。それより會議に列しました處、何分案の内容が重大に渉るから少しは遅れるだらう。併し二時頃には濟むだらうと思つて「二時より少し遅れるから其れ迄御待ちを願ひたい」と云ふことを宮中から電話を掛けました。所が到頭其日は會議が續いて午後六時になつた。それでもまだ會議が終らず、明くる日の午前十時から午後四時に至るまで、連日に亘つて御前會議がございました。陛下に於かせられても兩日共臨御あらせられましたので、如何に皆さん方と御約束をして居つても、臣子

の分として陛下の御諮詢に應じて御前の會議に列した以上は、どうも中途で退席する事が出来ないのではありません。それ故に遺憾ながら破約の罪は受けても、御前會議を退席致さず、到頭皆さん方を無駄に此處に御集會を致させて、私も遂に皆さん方に御目に懸かる機會を失したのです。併し御前會議を御開きになつて、其席に列して居る者の違約に對しては、皆さんは必ず御許しになることは私は確信致しましたから、心には懸りながら遂に其日は罷出せんでした。然るに其晩田中學務部長が來られて、急に御前會議があつて御出席が出来ないとの事故から意見交換會にしました。皆さん方も少しも不快の感を抱かず退散されたから、取敢へず其事を御報告致します。就てはどうか此次には是非御講演を願ひたいと言はれましたから、それでは私は何時でも宜い陛下の御諮詢に就いて御前會議のな以上は、如何に雨が降らうと火が降らうと、今度は必ず罷出ると申しました。

即ちそれが今日の此御會合であります。併し圖らざりき、今日は此夏になつても暑い日で、實に皆さん方には御迷惑と考へますが、一つ私の回顧談を御聽を願ひたい。即ち是は各所で致しましたし、殊に陸海軍の招請に應じて演説を致しましたのは、それ〴〵印刷にせられた物もある。併し陸海軍で話したのは區域が限つてあつて、陸軍は陸軍の事を、海軍は海軍の事を主として御話致しました。今日は教育家の御集りであるから、其以外の事も御話する積りで罷出た次第であります。或は餘り長くなつて御退屈になるかも知れませんが、先づ私の根氣が續く限り遣りますから、若し御退屈になられたならば、何時でも自由に御退席になつても差支がないのであります。

御承知の通り日露戦役のことは、明治三十七年の二月四日の御前會議に於て極まつた。二月四日午後三時から明治天皇の御前に於て、元勳と陸軍海軍外務大藏

の大^{だい}臣^{じん}が會^{くわい}議^ぎを開^{ひら}いて、日^{にち}露^ろの交^{かう}渉^{せう}は如^{いか}何^ななる手^{しゆ}段^{だん}を執^とつても解^{かい}決^{けつ}が出^で来^きない、況^{いは}んや之^{これ}を圓^{えん}滿^{まん}に解^{かい}決^{けつ}するこは全^{まった}く出^で来^きぬ。我^{われ}一^{いっ}步^ぽ讓^{ゆづ}れば彼^{かれ}一^{いっ}步^ぽ進^{すす}む。又^{また}一^{いっ}步^ぽ讓^{ゆづ}れば尙^なほ一^{いっ}步^ぽ進^{すす}んで際^{さい}限^{げん}がない。此^{この}儘^ま推^おし進^{すす}めば何^ど處^こまで推^おして往^いつても露^ろ西^し亞^あが我^{わが}國^{くに}の要^{えう}求^{きう}に應^{おう}ずるこはなから、已^やむを得^えず國^{くに}を賭^として、干^{かん}戈^かに訴^うへて此^{この}日^{にち}露^ろ兩^{りやう}國^{こく}の難^{なん}問^{もん}題^{だい}を解^{かい}決^{けつ}するの外^{ほか}ないと云^いふ決^{けつ}論^{ろん}に到^{たう}達^{だつ}して、遂^{つひ}に其^{その}事^{こと}を陛^{へい}下^かに奏^{そう}聞^{もん}しました。午^ご後^ごの六^じ時^じ少^{せう}し前^{まへ}に愈^い々^{よく}日^{にち}露^ろ開^{かい}戦^{せん}と御^ご決^{けつ}定^{てい}あらせられた。其^{その}晚^{ばん}六^じ時^じ頃^{ころ}のことです。私^{わたくし}の宅^{たく}に靈^{れい}南^{なん}坂^{ざか}の伊^い藤^{とう}樞^{しゆ}密^{みつ}院^{いん}議^ぎ長^{ぢやう}から電^{でん}話^わが掛^かつて、急^{きふ}に相^{さう}談^{だん}したいこがあるから即^{そく}刻^{こく}來^きて貰^{もら}ひたいと云^いふことであつた。日^{にち}露^ろの關^{くわん}係^{けい}は三十六年^{ねん}の冬^{ふゆ}頃^{ころ}から段^{だん}々^く險^{けん}惡^{あく}になつて來^きたから、是^{これ}は何^{なに}か容^{よう}易^いならぬこが起^{おこ}つたに違^{ちが}ひないと思^{おも}つて、直^たち車^{くるま}を驅^かつて伊^い藤^{とう}公^{こう}の官^{くわん}舎^{しゃ}に往^いつた。それは六^じ時^じ半^{はん}頃^{ころ}でありました。さうして平^{いっ}常^{じょう}の通^{とほ}り二^に階^{かい}の伊^い藤^{とう}公^{こう}の書^{しよ}齋^{さい}に入^いりました。其^{その}書

齋^{さい}は御^ご承^{じやう}知^ちの御^お方^{かた}もありませうが、真^ま中^{なか}にテ一^{てい}ブルがあつて、其^{その}向^{むか}ふに伊^い藤^{とう}公^{こう}の安^{あん}樂^{らく}椅^い子^すがある。テ一^{てい}ブルを隔^{へだ}て、此^こ方^{なた}に客^{きやく}が坐^{すわ}る椅^い子^すが備^{そな}へてある。私^{わたくし}が伊^い藤^{とう}公^{こう}の書^{しよ}齋^{さい}に入^いつて見^みると、伊^い藤^{とう}公^{こう}は手^てを拱^{こま}ねて下^{した}を向^むいて居^かられる。のみならず下^{した}唇^{くちびる}を深^{ふか}く喰^く込^こんで頻^{しき}りに小^こ首^{くび}を傾^{かたむ}けて物^{もの}思^{おも}はし氣^きに坐^{すわ}つて居^かられる。私^{わたくし}が室^{むろ}に入^いつても氣^き付^つかれな。唯^{ただ}じつと思^{おも}ひ沈^{しづ}んで居^からる。私^{わたくし}は其^{その}前^{まへ}に立^たつて「只^{ただ}今^{いま}電^{でん}話^わでございしましたから罷^まり出^でましたが何^{なん}の御^ご用^{よう}ですか」と訊^{たづ}ねた。併^{しか}し一^{いっ}言^{ごん}の返^{へん}答^{たふ}もない。私^{わたくし}も黙^{だま}つて稍^やしほら其^{その}前^{まへ}に立^たつて居^かりました。二^に三^{さん}分^{ぶん}経^へつてから又^{また}再^{ふた}び「何^{なん}の御^ご用^{よう}でございしますか」と言^いふと、伊^い藤^{とう}公^{こう}は「まア、椅^い子^すに掛^かけ給^{たま}へ。」斯^かう言^いはれた。依^{よつ}て私^{わたくし}は椅^い子^すに腰^{こし}を掛^かけた。さうすると伊^い藤^{とう}公^{こう}の言^いはれるには「君^{きみ}は食^{しょく}事^じは濟^すんだか。」「私^{わたくし}は食^{しょく}事^じは濟^すみました。」「吾^{わが}輩^{はい}はまだ食^{しょく}事^じをせぬから食^{しょく}事^じをして、それから後^{のち}に用^{よう}向^{むき}を御^お話^わししよう。」と言^いはれた。それから女^{ぢよ}中^{ちゆう}を呼^よんで食

事を取寄せられた。伊藤公の食事は例に依つて極く質素なものであります。吸物と刺身と何か一つ煮た物が其前に置かれる。伊藤公が茶碗の蓋を取られたのを私が覗けば中は白粥である。それから膳の上に載つて居る食鹽を少し其の中に入れて箸で掻き混ぜて、白粥一碗啜られたのみで、吸物も刺身も煮た物にも箸を着けられない。さうして女中に命じて、それを下げさせる、食事も進まぬと見える。私は長く伊藤公の知遇を受けて側近して居て親しく知つて居ますが、國家の重大なる問題が起つて非常に憂慮される時には、必ず下唇を喰込んで考へる癖があつた。それで私は其態度を見て直に是は管ならぬ事が起つたのであらうと感じた。食膳を撤した後、傍にあるボート、ワインをコップに注いで一杯飲んで、

「今日君を呼んだのは外の用ではない、是から急に亞米利加に往つて貰ひたい。」と斯う出し抜けに私に言はれた。

「それはどう云ふ御用でございますか。」

「今日御前會議に於て日露開戦と極まつた。只今小村に命じて露西亞駐在の栗野公使に國交斷絶を通知する電報を發したから、明朝は必ず露西亞の帝都に於て國交斷絶、開戦の發表になる。就ては君に直に亞米利加に往つて貰ひたい。」

私は餘りの突然に驚きました。日露戦役のことは昨今の形勢より察して略々茲に至らうとは考へて居つたが、私に亞米利加に往けと云ふことは思ひ掛けないことであつた。

「それは如何なる譯で私が亞米利加に往くのですか。」

と尋ねると、伊藤公の言はれるには、

「此日露の戦争が一年續くか、二年續くか又は三年續くか知らぬが、若し勝敗が決しなければ兩國の中に入つて調停する國がなければならぬ。それが英吉利は

我が同盟國だから隊は出せぬ。佛蘭西は露西亞の同盟國であるから亦然りて、獨逸は日本に對しては甚だ宜しくない態度を執つてゐる。今度の戦争も獨逸皇帝が多少峻かした形跡がある。依て獨逸は調停の地位には立てまい。唯頼む所は亞米利加合衆國一つだけである。公平な立場に於て日露の間に介在して、平和克復を勸告するのは北米合衆國の大統領の外はない。君が大統領のルーズベルト氏と豫て懇意のことは吾輩も知つて居るから、君直ちに往つて大統領に會つて其の事を通じて、又亞米利加の國民にも日本に同情を寄せるやうに一つ盡力して貰へまいか。是が君に亞米利加に往つて貰ふ主なる目的である。」と沈痛な態度で申されました。事餘りに唐突でございましたから私は之に答へて「洵に此戦争の終局に就いては御高見の通りであります。私は長い間亞米利加に留學して、又亞米利加には度々往きましたから、亞米利加をよく知つて居

るが爲に、私は今日不幸な地位に立たなければならぬ。私が亞米利加の事情を知らなければ直ちに此處で御請けをするかも知れませんが、亞米利加の事情を知つて居るが爲に私は御斷りを致します。」

「それはどう云ふ譯か。」

「それは閣下も御承知の通り、亞米利加が獨立して間もない、千八百十二年に英と米との戦の折には、歐羅巴各國は皆な英を助けたが、獨り露西亞だけは合衆國側に立つて影になり日向になり援助した爲に、あの戦も相引になつて講和條約が出来た。爾來亞米利加の人は非常に露西亞を徳として居る。其次には千八百六十一年から六十五年まで五箇年間續いた南北戦争、是は合衆國の南部と北部とが奴隸廢止のことから兄弟争をして戦ふやうになつて、非常な激戦であつた。其時には英吉利は全力を擧げて南方を助け、兵器彈藥は勿論、軍艦まで

も造つて渡した。かくして北方を壓迫しようとする掛つたことは、閣下も御承知であらませう。のみならずアラバマと云ふ軍艦を南方に送つて遣つて、非常に北方の軍艦を荒した。英吉利の艦隊が紐育灣に入つて、紐育の市民を恐喝しようとした。然るに露西亞は直ちに艦隊を派して紐育の港の口に整列させて、英吉利の軍艦が大西洋から紐育港に入ることが出来ぬやうにして、英吉利の艦隊の示威運動を阻止した。のみならず露西亞の旗艦は直ちに小蒸汽船を卸して司令長官が之に乗つて紐育市に上陸し、直ちに市廳に往つて市長に會ひ、我が露國は英吉利に反して北方を助ける。今日英吉利の艦隊を港口に於いて留めて置いた。露國は北方に賛成するから其旨を今日御通知申すと通告した。それから司令長官が幕僚を率ゐて馬車に乗つて亞米利加の旗と露西亞の旗とを持つて市内を練り廻つて亞米利加に同情を寄せた。斯の如く政治上、亞米利加合衆國

は露國から恩を受けることが多大であつた。今尚ほ紐育なり其他の所に、六十年以前の戦争に露西亞の軍艦が紐育港に入つて来て、助けて呉れたことを目撃した人が生きて居る。それ故に露西亞と亞米利加との間は非常に國交が親密である。以上は政治上・外交上の關係である。次に商業上は如何。浦鹽、旅順等の軍需品・食料品は勿論西伯利亞鐵道に用ゐる鐵軌・機關車・貨車は多くは亞米利加から供給されて居る。其他市俄古・セントポール・ミネアポリス等の貨物は悉く桑港・シャトル・晚香坡から浦鹽・旅順に向つて居る。かく商業上に於ても露國と亞米利加とは密接なる關係がある。尚ほ社交上は如何、米國の富豪は金は澤山持つて居るが名譽が無い。そこで露西亞の貴族と婚姻して居る。現に前大統領グラント將軍の長女は露西亞の第一公爵の妻になつて居る。其他市俄古・紐育・費府の富豪の娘も、露西亞の貴族と婚姻して居るから米露の國

民は婚姻關係から家族的の親戚になつて居る。政治上・外交上・商業上・家族上・此四つの密接なる關係がある。露國と亞米利加とは斯くの如き關係があるに拘らず、關係の薄い日本から私の如き者が往つて、如何に亞米利加の同情を動かさうとしても是は不可能である。今日は國家危急の際でありますけれども私が亞米利加の事情を餘り知つて居るが爲に、此任務は到底見込はない。金子の微力では米露の此四つの密接なる關係を打碎いて、日本に同情を寄せさせようと云ふことは、金子の勢力では出来ない。遺憾ながら私は御辭退するの外は御座いません。」

斯う言ふと伊藤公は、

「併し君が往つて呉れなければ、此任務を果す者は外にない。」

「かういふ事を私から述べるとは甚だ烏澁がましいけれども、實際伊藤公が

さう言はれた。それで私は、

「それはいけませぬ。」

——此處に鳩山夫人も居られますが——

「鳩山和夫君も吾々と同時に亞米利加に居つた。小村壽太郎君亦然り。目賀田種

太郎君も居る。幾らも他に留學した人がありますから、それに御命じになつた

ら宜からう。自分は此任務を果すには適任でない。」

と御斷りした。さうすると伊藤公が言はれるに、

「それは皆夫々立派な人に違ひないけれども、ルーズベルト氏との關係は君が一

番親密だ。君の外にない。君が往かなければ亞米利加は取逃がす。」

と云はれた。依て私は、

「それはさうかも知れませぬ。併し此の大任に當る適任者がたつた一人日本に在

る。誰かと云ふと、それは閣下である。閣下は明治初年アメリカに往つて、貨幣制度の改革から、各省の官制の改革に就いて取調をせられた關係から、亞米利加人は閣下を日本の建設者として尊敬して居る。閣下が此任に御當りなされるならば、右の四つの米露の關係を打碎いて、亞米利加をして日本に對して同情を寄せさせることは受合である。閣下の外に此任務を遂げる者はない。金子の如きは到底其任でない。」

と、斯う私は斷言しました。所が伊藤公が言はれるに、

「僕が往かれれば君には頼まない。僕は今日御前會議で愈々日露開戦と極まつた時に、陛下から伊藤は我が左右を離れては困る。此日露戦役中は伊藤を我が左右に置いて、總ての事を相談をするから、海外に往くことは相成らぬと云ふ御沙汰があつたから、僕は往きたくても往けない。」

「左様でございますか、お言葉によれば御渡米の出來ぬことは御尤である。併し私が如何程粉骨碎身しても此任務は成功の見込がない、成功の見込のないのに私が御請して往つた所が唯使命を汚すのみです。どうか他人に御命じ下さい。」と固辭した。所が、伊藤公曰く、

「君は成功不成功の懸念の爲めに往かないのか。」

「左様でございます。」

「それならば言ふが、今度の戦に就ては一人として成功すると思ふ者はない。陸軍でも海軍でも大藏でも、今度の戦に日本が確實に勝つと云ふ見込を立て、居る者は一人としてありはしない。此戦を決める前に段々陸海軍の當局者に聞いて見ても成功の見込はないと言ふ。併しながら打捨て、置けば露國はどんな満洲を占領し、朝鮮を侵略し、遂には我が國家を脅迫するまでに暴威を振ふ

であらう。事茲に至れば國を賭しても戦ふの一途あるのみ。成功不成功などは眼中にない。斯く言ふ伊藤博文の如きは榮位榮爵生命財産は皆な陛下の賜物である。今日は國運を賭して戦ふ時であるから、我が生命財産榮位榮爵悉く陛下に捧げて御奉公する時機であると思ふ。我輩と雖成功の見込はない。君の榮位榮爵生命財産も亦博文と同じく、陛下の賜物ではないか。故に君も博文と共に手を握つて此雜局に當つて貰ひたい。斯く言ふ伊藤は若しも滿洲の野にある我が陸軍が悉く大陸から追拂はれ、我が海軍は對馬海峡で悉く打沈められ、愈々露西亞軍が海陸から我國に迫つた時には、伊藤は身を士卒に伍して鐵砲を擔いで、山陰道か九州海岸に於て、博文の生命のあらん限り露西亞軍を防ぎ敵兵は一步たりとも日本の土地を踏ませぬと云ふ決心をして居る。昔元寇の時に北條時宗は身を卒伍に落して敵と戦ふ意氣を示した。さうして其時妻にどう言

つたか、汝も吾と共に九州に來れ。さうして粥を炊いて兵士を勞らへと言た。今日伊藤も、若し其場合になれば我が妻に命じて、時宗の妻と同様に九州或は山陰道の海岸に於て粥を炊いて、兵士を勞らへ、さうして斯く言ふ博文は鐵砲を擔いで露西亞の兵卒と戦ふ。斯く迄自分は決心をして居る。成功・不成功など云ふことは眼中にないから、君も一つ成功・不成功は措いて問はず、唯君が有らん限りの力を盡して米國人が同情を寄せるやうにやつて呉れ。それで若し亞米利加人が同情せず、又いざと云ふ時に大統領ルーズベルト氏も調停して呉れなければ、それは固より誰が往つても出來ない。斯く博文は決意をしたから、君も是非奮發して米國に往つて呉れよ。」

と滿腔の熱誠を以て説かれた。そこで私も其熱誠に動かされて、「宜しうございます。そこまで閣下の御決心を伺へば成功不成功は決して問ふ所

では御座いませぬ。三寸の舌の有らん限り各所で演説をして廻り、三尺の腕の續く限りは筆を以て書いて、さうして舊友と日夜會談して及ぶだけの力を盡しませう。それは閣下の御希望通り目的を達しなければ金子の不徳、金子の無能と御承知を願ひたい。國を賭しての戦であるならば、金子も身を賭して君國の爲に盡しませう。」

と云ひました。斯く私が承諾をするや伊藤公は直ちに電話を以て桂總理大臣を呼び出して、只今金子が愈々亞米利加行を承諾して呉れたから尙ほ委細金子と相談して貰ひたいと云ふ事を通達せられた。そこで私は桂總理の官邸に往つて桂に向ひ、

「只今伊藤公から御前會議の決議で吾輩に亞米利加に往けと云ふことになつたことを聞き再三辭退したけれども是非往けと懇々云はれたに依り承諾したが成功するものと總理が吾輩に望んで貰つては困る。其理由は伊藤公から聞いて呉れ給へ。」

と云ひますと桂は、

「それは無論だ。君が米國に行けば彼の國に於ける事は君に一任する、是で俺も安心した。併し外交の事は小村君に會つて詳しく聞いて呉れる。」

依て私は外務省で小村大臣に會つて、日露の交渉の初めから今日開戦に至るまでの沿革を聞き、又緊要なる書類を貰つた後小村大臣に向ひ、

「吾輩が米國に往く以上は、政府から一々斯うして呉れる、あゝして呉れると言ふ指圖は御免蒙りたい。吾輩は自分の考を以て働く。一々斯うしろ、あゝしろと政府から指圖をされては十分な活動は出来ない。其事は伊藤公にも懇々言つて置いた。」

と云ふと、

「君に一任する以上は、君の自由の行動に任かせる。」

と小村大臣が言つた。

是より先き私が桂總理大臣に面會して亞米利加に往くことを承諾したる由を告げたる時桂總理曰く、

「今回渡米するに就ては特命全權大使と云ふ名前をやつても宜い。樞密顧問官に任じても宜い。其の外如何なる官職でも希望があれば君にやつて宜い。」

と言はれた。當時私は内閣を去つて在野の人となり一個の貴族院議員たるに過ぎなかつた。併し桂總理が如何なる官職でもやると言つたのを斷つたのである。其理由は吾輩が若し官職を持つて米國に往けば、金子の行動は政府からの訓令である。彼の演説は政府の命令である。吾輩のすることは總て政府の差金より出たと

云ふことになる。又外國人と會つて色々議論したときに若し私が言ひ過ぎるか又は露西亞を攻撃することが激甚であつた時には、直ぐ日本政府に其影響がある。若し私が官職を持つて居れば必ず政府に累を及ぼすから、私は無官の一人として米國に飛込む。然らば吾輩のする事、言ふ事、悉く吾輩のみの責任に歸し決して政府に迷惑が掛からぬ。其れ故萬事吾輩に一任して貰ひたい。と斯う言ふた時桂總理が、

「それぢや宜しい、官職も要らぬならばやらぬが米國にて新聞を買収するか又は記者を操縦する爲の費用は十二分君に支給しよう。」

「夫れもぢ斷りする、若し一二の新聞を買収するか又一二の記者を操縦する時は他の新聞は連合して反對し、却て不利を招く故に、新聞に對しては一視同仁、誠意を以て待遇せんと欲するから僕は費用は一文も入らぬ。」

と云ひますと、桂總理は、

「然らば萬事君に一任せん。」

と互に協定した。

桂總理小村外務と會見の後陸軍に關する事を聞かうと思つて寺内陸軍大臣の官舎に往つた。偶々山縣元帥も來て居られて寺内と何か話の最中に私が往つたので「御兩君御揃ひの所で尙ほ結構である。私は愈々亞米利加に往くことを承諾しました。」

「それは大變御苦勞だ。」

「私は御苦勞も何も構ひませぬが、一體陸軍はどうなさる。」

「私から陸軍の軍略を聞くべきことでもないけれども、此場合單刀直入に、一體陸軍はどうですか、勝つ見込はありますか。」

と山縣さんと寺内大臣に聞いた。所が山縣さん曰く、

「それは向ふの參謀本部に兒玉源太郎氏が調べて居つて、あれがすつかり其の方の計畫をして居るから、彼處に往つて兒玉に會つて呉れ。」

「それならば宜しうございます。」

と陸軍大臣の官舎を辭して參謀本部に往つた。所が兒玉大將は部屋眞中に居つて、大勢の幕僚を集め地圖を擴げたり色々の書類を開けたりして研究をして居る所であつた。其處へ飛び込んだ。すると兒玉が、

「君が亞米利加に往くと云ふことを聞いて大に安心した。」
と言ふ。

「君は僕が亞米利加に往くから安心したと言ふが、僕が亞米利加に往けば此戦が勝てるか、君に聞くことがある。」

それから見玉は幕僚は皆彼方に往くやうにと遠ざけた。そこで再び、

「君は僕が亞米利加に往くから安心したと言ふが、僕は一向安心されない。只今山縣さんに聞けば君が總て陸軍のことは計畫して居ると言はれたが、一體勝つ見込があるのかどうか。第一にそれを聞きたい。」

と單刀直入に尋ねた。斯う云ふ時は手早い話でない間に合はぬ。一々大官に伺ひを立てると云ふやうな愚圖々々したことはして居られない。すると見玉が言ふ、
「其爲に僕は着の身・着の儘でカーキ服を着て、兵卒の寝る寢臺に赤毛布を引つ冠つて寝て、此參謀本部で三十日も作戦計畫をして居るのだ。」

「あゝさうか、さうして見込はどうか。三十日の結果はどうか。」

「さあ、まあ、どうも何とも言へぬが、五分々々と思ふ。」

「さうか。」

「併し五分々々では到底始末が付かぬ、解決が付かぬから、四分六分にしようと思つて此兩三日非常に頭を痛めて居る。四分六分にして六遍勝つて四遍負けるとなれば、其の中に誰か調停者が出るであらう。それには先づ第一番目の戦争が肝要だ。第一の戦に負けたら士氣が沮喪して仕舞ふ。だから第一番に鴨綠江邊の戦で露國が一萬で来れば此方は二萬、露國が三萬で来れば此方は六萬と云ふやうに倍數を以て戦ふ積りで、今ちやんと兵數を計算し、兵器・彈藥を集めて其の用意をして居る。一旦倍數を以て初度の戦に勝てば日本の士氣が振つて来る。併し若し之に負けたら士氣が沮喪するから今折角其の計畫をして居る。」
「さうか、それでは僕が亞米利加に往つて、紐育の大講堂に於て、日本に同情を寄せよ、露西亞は實に怪しからぬ國である、日本は國を賭して戦つて居ると云ふ大雄辯を振つて居る最中に、日本の負け戦さと云ふ電報は四度来るね。」

と言つたら、

「それは仕方がない、併し其代り僕が君に六遍勝ち戦さの電報をやるようにするから其積りて居り給へ。」

「それぢや六遍だけは勝ち戦さ、四遍だけは負け戦さで、僕が大雄辯を振つて居る最中、四遍は負け戦さの電報を聞き、こそく裏のドアから逃げねばならぬねー。」

と言つた位でありました。

それから茲を去つて海軍省に往つて、山本海軍大臣に會ひ、只今、山縣・寺内・兒玉氏等に會つて陸軍の方のことを聞いて來たが、君の方の海軍は勝つ見込はあるかと聞いた。すると、

「先づ日本の軍艦は半分沈める。其代りに残りの半分の半分を以て露西亞の軍艦を全滅させる。僕は斯う云ふ見當を付けて居る。」

「さうすると海軍の方は餘程陸軍より良い方だね。兒玉はこれく言つた。」と云ふて曩きの兒玉の談話を咄した。

「さうか、僕の方は其積りて半分は軍艦を沈める、又人間も半分は殺す故に君も亞米利加に於て、どうか其積りて居つて呉れ。」

と言つて互に手を握つて山本海軍大臣に別を告げた。

是が當時の日本政府の當局者の考であつた。此事は餘り人には言はなかつたが、あの連戦連勝の電報を見た國民は最初から勝つ、最初から此通りと思つて居つただらうが、それは大間違ひで、政府當局者は今言ふやうに陸軍は四分六分、海軍は半分の軍艦を沈める、伊藤公は負ければ身を卒伍に落して兵隊と共に戦ふと云ふのが當時の實情であつた。斯の如き有様が日露戦争の初めであつたが、其

後あゝ云ふ好い結果を得やうとは誰も思つて居らなかつた。

そこで當時、葉山の別荘に避難して居つた妻と後事を協議しようと思つて、二月十三日の午後の汽車に乗つて葉山に往きました。其頃は中々汽車に乗るなど云ふ安閑たる場合ではない。皆國家の前途はどうなるかと思つて人心恟々として居る時だから、横須賀行の車は唯香川皇后宮太夫と私の二人しか居ない。差向ひになつて香川が、

「今度亞米利加に御出になるさうで洵に御苦勞であるが、どうか十分日本の爲に御盡力を願ひたい。」

と云ふやうな話をして別れました。さうして其晩妻に向ひ今度の戦争は一年續くか二年續くか又三年續くか分らぬ。或は米國に往つて其の儘歸らず病死するかも分らぬが、後事は伊藤・井上の兩元老が引受けられたから、家計の事は心配する

に及ばぬ。若し暮しが立たぬやうになつたら伊藤・井上の所に駆込んで頼め。と言つて跡の話をして置きました。それから寢に就きました。さうすると翌十四日の朝八時頃目を醒ますと、不思議にも私の庭の中に靴の音がする。彼方にバタバタ、此方にバタ／＼走る人がある。今頃何事があつてこんな騒しいのかと思つて頭を上げた。是は巡查が泥棒か何かを追込んで駆廻つて探して居るに相違ないと思ひました。それから書生を呼んで、

「一體あの騒しい靴の音は何か、見て來い。」

と云ひ付けました。所が書生が歸つて來て、

「大變でございます。皇后様が此處に行啓になります。」

「なに皇后様が行啓になる。」

「はい、向ふの離れの家には、宮内省から來て、すつかり掃除が出來て、ちやん

と皇后様の行啓の御用意が出来て居ります。」

私の別荘は詰らぬものですけれども、母屋の方に私共家族が住居し、友達や客の爲に、山の上に八疊と六疊と三疊の三間ある離れを建て之に充てゝ居る。其の離れは餘程母屋から離れて居る。それをすつかり宮内省で掃除をして居ると云ふことを聞きましたから、私は是は大變だと思つて直ぐ飛起きて、フロツクコートを着て、妻や娘や倅にも衣服を更めさせ、待つて居れと言つて、私は其儘離れ家のある山の方に駈けて往つた、既にすつかり庭掃除から座敷中の掃除も済まし、八疊の間には宮内省から絨氈を持つて來て敷かれ、其處に皇后様の玉座の御椅子とテーブルが置いてある。其テーブルの上には金欄のテーブル掛が掛けてあつて、其横には小形の丸テーブルがあつて其上に手爐が置いてある。次の六疊には爐があります、それに銀瓶が掛つて湯が既に沸いて居る。そこに女官が坐つ

て居つて、陛下の御出を御待ちして居る。宮内官に向つて、

「一體今日行啓になるならば、なぜ私に一寸御知らせ下さらぬでしたか、突然の行啓で此通りの御準備をなされて、實に私は恐懼に堪へません。」

「いやさうお思ひになるのは尤ですが、實はこんな譯で御座います。皇后様が朝御飯を召上つて香川をお召しになり、今朝食事を済ましてから直ぐ金子の所に行くから其用意をせよ。併し自分が彼方に往く迄は金子に知らせるな、知らせると金子が心配するから往くまでは黙つて居れと云ふ御沙汰でありましたから貴下に申さず此通り準備致しました、もう程なく御出があらうと思ひます。」

それから直ぐ其儘濱に出ました所が、陛下には、御用邸の本門から御出にならず裏の御門から濱傳ひに私の別荘に御出になりましたから、濱邊で御出迎へして御先導申して、離れ家の八疊の間に御案内申しました。やがて妻と二人の娘、倅

に拜謁を仰付けられました。次いで私を御前に召されて 陛下は御椅子から御立ちになつて、私に御沙汰を賜りました。其御沙汰を此處に持つて居りますから拜讀致します。

「今朝は早々から金子の家を騒がせ洵に氣の毒に思ふ、昨夜香川より聽けば、金子は近々米國に渡航する由、其の御用の趣は知らざれども、此の度日露の兩國戦争となりたれば、金子が米國に往くことは必ず重大なる任務を奉じてのことならん。仍て御國の爲に十分盡力するやう親しく金子に依頼せんが爲め、今朝早々來りたる次第なり。尙ほ海陸長途の旅行及在米中は、折角身體を大切に して任務を盡されたし」
斯く優渥なる御沙汰を賜りました。私は此時此御沙汰を拜して、一言の御答も出來なかつた。餘りに有難い御沙汰であつて 皇后陛下が御國の爲め斯くまで御

心配になつて、態々金子の如き者の別荘に御出になり、其の上親しく金子に依頼したい爲に來たと云ふ御沙汰を拜しまして、私は恐懼の餘り一言の御答も出來なかつた。唯首を垂れて、

「謹んで御沙汰を拜し力の及ぶ限り御國の爲に盡力致します。」

と拜答した外は、胸一杯になつて何にも申上げることが出來ませんでした。此御沙汰が私が亞米利加に往く第一の守本尊でありました。それから女官を召されて紅白の御菓子を取寄せられて、私・妻・娘二人・俵に御手づから紅白の菓子を一つづゝ御下賜になりました。謹んでそれを奉書の紙に御請して下つて參りました。それから又私には仙臺平の袴地。妻には白羽二重。二人の娘には金襴で出來たハコセコ。俵には 陛下が御側で御使ひになる菊花の文鎮二個を賜りました。さうして、

「實は避寒中であるから別に品物もないが、唯持合せの物を持つて来て、今日の記念に遣はす。」

と云ふ御沙汰でありました。其の後色々四方山の御話を伺つて、金子の別荘の庭を少し見たいから、案内せよと云ふ仰であります。私の庭は狭いけれども陛下を御案内申上げて、それから濱邊の方に御下りになりました。金子も倅と共に御供せよと仰せになりましたので、倅と共に濱邊の御散歩の御供致しました。やがて還御の時に、金子の別荘は景色が好いから、もう一度休息しようと思はれ、再び元の玉座に御案内致しました。時恰も二月の十四日、私の別荘から眞向ふに富士の山が見える。積雪皓々として實に其日は空も晴渡り、綺麗な富士の景色を御覧になりました。陛下は、

「此景色は御用邸にもない景色である。金子の留守中は時々此別荘を借りるから

其事を留守番の者に申し置いて呉れよ。」

と云ふ御詞でありましたので、

「いつ何時でも御用がありますれば御使ひ下さるやう。」

と申上げました。聽て還御遊ばされましたのは十一時頃でございました。それから直ちに私は御用邸に参内して御禮を申上げまして、歸つて来て紅白の御菓子が十個ありますから其内吾々夫婦子供のために一個宛除けて、あとの五つは奉書紙に包んで重箱に入れて、書生に持たせて東京の本邸に送りました。それはどう云ふ譯かと申しますれば、當時近衛師團が出征の爲に、番町邊一般に個人の家に出發するまで宿泊して居つて、私の本邸にも亦中尉以下兵士が二十人ばかり宿泊して今や出征の命令の下るのを待つて居りましたから、直ちに之を持つて歸つて軍人に渡し、今日 皇后陛下の不時の行啓があつて、此御菓子は御手づから賜つたも

のであるから出征軍人に之を分ける。どうか皆に頂戴さして貰ひたいと傳言しました。本邸の執事から其事を宿泊して居る尉官に傳へました所が、尉官が兵士に命じ庭の井戸で口を漱ぎ手を洗はしめ、奥から三寶を借りて五つの菓子を其上に載せ之を小片に切つて兵卒二十人に分けたさうです。さうして其士官が兵卒を其處に整列させて曰く、

「此御菓子は 皇后陛下が御手づから賜つた菓子である。金子さんから之を君達に分けると云ふので頂戴致した。其小片の端を少し頂戴して残りは紙に包んで背囊に入れ、さうして出征せよ。後日戦地に於て進軍の命令が下つたならば、其菓子を少し食べて 皇后陛下の御菓子が我が腹に入つた以上は 皇后様の御恩威が我を守ると云ふ決心で突貫せよ。」

言ひ聞かせたさうです。それから私が葉山の用を濟ませて歸つて來たら、本邸

に居つた兵士は昨夜立ちましたと云ふことを執事が申しました。それから間もなく私も亞米利加に参りまして、二箇年滞在して無事に歸りましたが、私は皇后様の御菓子を頂戴したのと、優渥なる御沙汰を賜つた結果でありませうか、二箇年の滞米中東奔西走したけれども、未だ嘗て一回も病氣で寝たことがない。實は私は一體身體が餘り丈夫でないのが、あの劇務に従事したけれども、一度も患はないで、翌年の三十八年の冬に歸つて参りました。私が歸つて後一週間ばかりして、嘗て私の家に宿泊して居つた兵士の總代の一人が玄關に來て、私は丁度外出して居りませんでしたか――

「今日は近衛師團が無事に凱旋致しました。此御屋敷に宿泊して居つた近衛の兵士二十人ばかりは鴨綠江最初の激戦から得利寺・遼陽・沙河、其他奉天まであらゆる激戦に参加しましたが、一人も戦死せぬ、鐵砲の彈丸も當らない、又一人

として病氣に罹つて死んだ者が無い。是は全く 皇后陛下の御菓子頂戴した結果と私共一同は考へますから、今日は無事歸朝の御報告をなし其禮に参りました。」

と云ふことを告げて歸つた。依て私は直ちに参内して、皇后陛下に拜謁を願つて香川皇后宮太夫、其他女官の侍立する所で、凱旋兵士の言つたことを詳しく申上げました。さうすると 皇后陛下は香川及び女官達を顧みて、

「皆聞いたか、實に珍しく又目出度いことでありませぬか。一人も戦死せず又病死もせず、無事凱旋したと云ふことは實に目出度いことである。」

と云ふ御詞が御座いました。さうして尙ほ、
「金子には長々の滯米御苦勞であつた。滯米中の事は時々香川から聞いて居つたが非常に骨の折れたことであつたらう。金子も無事に歸つて洵に喜ばしい。而

して將來又金子の力を要することがあるかも知らぬから、將來も身體を大事にして置くやうに。」

と云ふ優渥なる御言葉を頂戴致しました。

斯の如き 皇后陛下が在らせられて、吾々如き者に斯く優渥なる御沙汰を賜はりましたから、私は勿論我が一家親類 悉く皇室の爲には身を抛つて國の爲に盡さねばならぬと云ふ精神が、起らざるを得ぬのであります。依て私は將來さう云ふ様に心得ると云ふことを、子供共や孫や親類共にも申付けました。是が當時の有様であります。

それから私は行李を整へて二月の二十四日に随行員阪井徳太郎鈴木純一郎の二人を伴つて亞米利加に向ひました。併し伊藤公の話、陸海軍當局者の話を回想して見れば、十八日間 桑 港迄の航海と云ふものは、實に慘澹たるもので、將來

どうなるか分らぬ。亞米利加は如何なる有様であるか、如何にしようかと唯計畫を工夫するだけであつた。私が其時の感想を詠じた詩がございます。其詩は即ち私の心情を吐露したものである。

翼賛宏猷在此秋 奮然遙向舊遊洲

五千海路風雲暗 皇國存亡一葉舟

宏猷と云ふのは天子の謀。宏猷を翼賛するは此秋に在り、奮て遙に向ふ舊遊の洲、舊遊の洲とは昔し留學して居つた亞米利加のこと。五千海路風雲暗し、太平洋航路は五千涯ある、五千海路は風曇暗く、皇國の存亡は一葉の舟、日本の存亡は一つの笹の葉の舟に似たやうな危いものである。即ち私も笹の葉に乗つて往く。是が當時の私の心情を吐露したものであります。

それから三月十一日に桑港に着きました。總領事は只今の宮内省大膳頭の上

野季三郎君であつた。其報告に依れば開戦の當初は小さな日本の國が、あの龐大な露西亞に向つて戦をすると云ふことは實に偉い勇氣だと言つて一時は大分日本に同情をしました。亞米利加人は御承知の通り "Under dog" (アンダー・ドッグ) と云ふ方にいつも賛成する。弱い小さい犬と大きな強い犬と途中で咬合ふと云ふと、通行者は其犬の性質や犬の所有者は分らぬが、弱い方の犬を庇ふて大きな強い犬をステッキで殴る。さうしてアンダー・ドッグを保護する。日本が丁度アンダー・ドッグに當るから當初は同情は寄せて居つたが、困りましたことは三月の十日、即ち私が着く前の日に亞米利加合衆國の大統領が局外中立の布告を出した。それが亞米利加全國の新聞に載せられた。其局外中立の布告に依れば、今度日露の戦争が始つて、露國と言ひ日本と言ひ、何れも亞米利加の修交國である。故に此兩國何れか一方に加擔し、又應援すると云ふやうな言論行爲は一切嚴

禁である。陸海軍の武官は勿論、文官も國民も、兩方に最良してはならない。若し一方に最良すれば一方に悪感情を起さしめて遂に國交に影響を及ぼすから、一切さう云ふ行爲は慎めと云ふ嚴正中立の聲明であつた。そこで今迄日本に寄せて居つた同情が、此の聲明によつて止んでしまつたと云ふ。それを聞いた時に私は落膽した。嘗てハーバート大學の同窓關係から懇意なるルーズベルト氏が大統領になつて居るから、華盛頓に往つて、援助して貰はうと頼みに思つて上陸した。而るに前の日に亞米利加國民は一切日露兩國に對して、援助又は片手落のことはしてならぬといふ布告が出たのである。然らば吾輩が往つて如何に之に縫つても嚴正中立の布告を出した發頭人に、日本に加勢を頼むと言つた所が承知しないに極まつて居る。私は實に失望した。そこで兎も角、桑港を立つて市俄古に往つた。市俄古の富豪は御承知の通り皆な露西亞人と婚姻關係がある。故大統領グラ

ンド將軍の一家も又ポッター・パーマーの一族もさうである。彼等の娘が露國の貴族の所に嫁いで居る。又彼處の商賣人は、旅順・浦鹽に商品を賣り込み、商業關係が結ばれてをる。日本から運動しても逆も手を出さ餘地がないから、早く此處を立つて紐育に往くと清水領事が云はれた。そこで市俄古を立つて紐育に參りました。所が紐育には總領事なり、正金銀行なり、三井物産なり、大倉組なり高田商會なり、高峰讓吉氏なり、多數の日本人が居つたが、其等の人々が私の宿屋に来て、

「日露の關係はどうなりますか。」

と言ふ。どうなるか誰も此先は分らない。

「併し一體亞米利加はどうか。」

と聞くと、

「私共は實に此戦が始つて以來唯心配して寄合つて、どうしたら宜からうと額を集めて協議して居るのですが、貴方が御出でになつたから、どうか御指導を願ひたい。」

「いや僕に指導を願ふと言はれても僕にもどうしようと思ふ見當はまだつかぬ。」と答へるのみで、實に紐育にある同胞の在留人は皆落膽して居るのみ。後でこそ連戦連勝で偉い勢が付いたけれども、私が飛込んで往つた當時の日本人の顔色と云ふものは見られたものではなかつた。それはさうでせう、外國に居る者の身になれば、あゝ云ふ大戦争が本國に起れば心配するに極まつて居る。そこで熟く紐育の様を見ますと、どうも實に日本が不利の立場に在つた。私が旅館に著した所が新聞記者が陸續來訪しました。之を一室に集めて日露開戦の起因に付日清戦役後の三國干渉から説き出し現時に至るまでの沿革と國民の決心の状況を

詳述したから各新聞は翌日の紙上に之を掲載しましたから多少戦争の真相が米國人に分つた様であつた。

私が宿をして居る所はホランド・ハウスと言つて、紐育のフヒス・アベニューに在りますが、其一軒先にウォルドーフと言つて有名な人や立派な外交官などの泊る宿屋がある。私が着くと間もなく、それは豫て計畫してあつたものと見えて紐育の交際社會で花形と言はれたヒチコック夫人が主催となり、當市の富豪や有力な紳士の夫人が賛成人になつて、一大夜會をウォルドーフで催す企があつた。其の夜會の入場切符の賣上金は、露西亞の赤十字社に寄附して傷病兵の手當に使用すると云ふ觸れ込みである。即ち是は親露の宴會であつて各新聞は筆を揃へて業々しく書き立て愈々其夜は數百名の紳士淑女が寄つて大舞踏會を催した。其席に招待せられた露西亞の大使カシニー伯は自身は出席しなかつたけれども、

参事官を態々華盛頓から紐育に寄越して、宣言書を其席上で読み上げしめ日本が開戦したことは國際法違反なりと盛んに攻撃して米國人の同情を惹起する様巧妙なる言辭を以て聽衆に訴へた。是が翌日の新聞に載つた。是れ即ち私に對する脅威の第一でありました。

此時に當り露國大使カシニー伯は華盛頓に於て新聞記者を毎日大使館に招いて優待し、茶を飲ませる、ハバナの葉巻煙草又は埃及の紙煙草を遣る、シヤンパンを飲ませると云ふやうなことをして、頻りに新聞記者の機嫌を取り今度の戦争は日本の怪しからぬ陰謀である。我が露西亞は少しも戦意がないのに、突然仁川に於て我が軍艦を沈没させた。宣戦の布告をせずして唯國交斷絶だけで戦争を開始すると云ふ日本の態度は、國際公法違反であると頻りに宣傳する。さうして紐育ヘラルドと云ふ新聞が先鋒となつて盛に露國大使の言ふことを受賣りをして同紙

に發表する。のみならず露國大使は今度の戦争は宗教戦であつて耶蘇教と非耶蘇教の戦である。露西亞は耶蘇教國で日本は非耶蘇教國である。故に歐羅巴・亞米利加の耶蘇教國は擧つて此非耶蘇教國の日本を撲滅しなければ、耶蘇教が東洋に傳播せぬ。仍て歐米の耶蘇教國は聯合して露西亞を助けると云ふ。のみならず大使又曰く日本は何だ、露國に較べて見ると實に小つぽけな國である“Yellow little monkey” (黄色の小猿) が何が出来るか。何故かと言ふと露西亞は世界無比の強國であつて、歐羅巴の強國と雖も露西亞に指一本指す事が出来ない。國土も尨大で人口も多い。陸海軍も整つて居る。それに小つぽけな黄色な小猿が戦をしようと云ふことは實に烏澁がましい。見てをれ二三箇月の中には日本の國を撲滅させて見せるぞ。氣の毒なものであると言ふて頻りに日本を攻撃した。そこで新聞記者が其の記事の切抜を持つて來て私に見せて、

「是に對する貴下の意見を聞きたい。」

と言ふ。それで私は一々之を見て、

「是は辨駁すれば幾らも辨駁ができるが、簡単に言へば、第一露西亞大使は宣戰の布告なしに戦をしたのが國際法に背くと言はれるが、今日では國交斷絶すれば直ぐ戰端を開いて宜いと云ふことは、國際公法の常例になつて居る。宣戰の布告は後でも宜い。現に露國が先年土耳其と戦をした時に、國交斷絶の後直ちに戰鬪行爲に出で、其數日後に宣戰の布告をしたではないか。露國自身の歴史を見てもさう云ふ先例がある。日本は決して國際法に違反したことは行つて居らぬ。」

と是は向ふの歴史を以て説明した。

「第二に宗教戰であると言つて峻てるとは何事か。是は往昔 Crusade (十字軍)の時耶蘇教國が非耶蘇教國を撲滅せんとしたことがあるが、今日は日本が非耶蘇教國か、露西亞が非耶蘇教國か事實が證明する。嘗てキシネフに於て露西亞政府が人民の虐殺を行つたことがある。之れ果して耶蘇教國のすることであらうか。現に此事に就て歐米の文明國は非常に露西亞を攻撃して居るではないか。又露國は政治上の罪を犯した者を西伯利に送つて極刑を科し、其待遇亦甚だ殘虐を極めて居る。此點に就ても耶蘇教國の人が皆攻撃して居るではないか。之に反して日本は憲法を以て宗教の自由を評して居る。耶蘇教でも佛教や神道と同じやうに保護して居る。然るに露西亞はどうであるか。露西亞のグリーキ・オセドークの宗教ではカソリック宗でもプロテスタント派でも許さないではないか。我が日本國は宗教は自由である。是も露西亞の方よりも日本の方が遙に自由である。第三に露西亞大使の言ふ如く露國の尨大な國土と、人口の多數な

ると、兵備の完備した點では日本は比較にならない程劣つてゐる。此事は吾々も知つて居る、日本の政府當局も知つて居る。然らば日本は何が故に此戦をしたのであるか。國土と言ひ人口と言ひ、兵器の完備の點から言つても、日本は少しも露西亞に優る所がなくして、何の爲に戦さをしたか。是は數年前から日露の關係が險惡になつて、我一步を譲れば彼一步進み、飽足らざる利慾を以て、飽足らざる壓迫を以て我が日本に加へ、此儘行けば日本は遠からず露西亞の爲に撲滅される危機に臨んでゐるから、座して露西亞の爲に亡ぼされるのを待つよりは、寧ろ失敗を度外して、進んで劍を取り國を賭して戦つた方が宜いと云ふのが我が日本人の決心である。最後の一錢まで、最後の一兵卒まで日本は戦つて往くのである。今日は國の存亡を賭しての戦であるから、此事をどうぞ能く考へて置いて呉れ。決して吾々は勝つ見込があつてしたことはない。

是だけは辯解して置く。」

と云つた。それが翌日の新聞に載つて米國人の注意を惹いた。

其後間もなくセント・パトリックと云ふ祭日がありました。是は愛蘭の國祭日でありませす。此セント・パトリックの祭日には愛蘭系の亞米利加人だけが、毎年馬車に乗つて市中を練り歩くのが例であります。其の日に限つて露西亞の旗と愛蘭の旗を兩手に持つて、何千人といふ人が紐育の町を練り歩いた。先頭に立つて居るのが紐育の市長であります。其市長が愛蘭系であつたものですから、是亦馬車の中から露西亞と愛蘭の旗を打振つて來て、私の宿屋の前に留つて私の居る部屋を見上げて、其旗を打振つて私に是れ見よがしに脅威したこともありませす。私は斯の如き裡に在つて、殆んどどうして宜いか思案に暮れた位であつた。其時に紐育の警視總監が私の所に使者を遣はして、

「實は日露の戦争が始まると、露西亞の大使の申出では『日本人は随分暗殺はやり兼ねないと云ふから日本人が或は爆弾を投付けるかも知れぬ。或は暗殺するかも知れない』と危険がるので露西亞の大使が外出するときは護衛巡査（是は日本で所謂角袖の巡査）を傍に附けることにした。先日新聞に貴下の露西亞攻撃の御意見が出たが、露西亞人は之を見て必らず憤慨するだらうと思ふから貴下に或は危害を加へるかも知れぬ。米國は局外中立國として露國の大使を保護すると同様に、日本に對して貴下は大使ではないけれども、矢張角袖の巡査を附けたいと思ふが如何ですか。」

と言つた。其時私は、

「誠に御厚意は有難いけれども私は大使でもない、公使でもない。唯一個人として亞米利加に來て居るのであるから、官府の保護を仰ぐ資格はない。」

「けれども危険があるかも知れぬ。」

「宜しうございます。若し私が此處で露國の人、又は露國最良の人から爆弾を投ぜられて死ぬとか、又は暗殺されるとかしたならば、金子は満足する。金子は命を賭して米國に來て居るのであるから、暗殺をされても一向構はない。併し一人の金子が暗殺されたならば、一億有餘萬の亞米利加人の半分位は定めし日本に同情を寄せて呉れるであらう。一人の金子の死が五六千萬の亞米利加人の同情に替はる事が出来れば、私は喜んで死ぬから、どうか角袖巡査はよして下

ろさ。」

と言つて斷つた。それで私は二箇年程居つたけれども一度も角袖巡査は附けて貰はなかつた。併し再三脅迫状や無名の投書で、明日の演説は注意せよとか又は何處の演説は覺悟をしろと云ふやうな脅威がありました。

以上の如く一應紐育の形勢が分つたから一先づ紐育を去つて、三月の二十一日に華盛頓に参りました。ルーズベルトは先に申した通り局外中立の布告を出して警告した大統領である。以前ならば友達であるから玄關から名刺を出してルーズベルト氏に會ひたいと言へるけれども、今日は局外中立の布告を出して居るのであるから、國際の法規に依つて正式に會ふの外無いと思つて、高平公使に會つて、

「僕はルーズベルト氏とは舊友であるけれども、今度は斯う云ふ場合であるから御苦勞であるがルーズベルト氏に手紙をやつて、金子が會ひたいと言ふから何日何時御都合が好いか、時間を御示しを願ひたい。」

と聞いて貰ふことにした。高平公使は早速公文を以て問合せて呉れた。さうすると明日の午前十時に官邸に來いと云ふ回答が來た。そこで翌日約束の時間に高平

公使と同伴し訪問して玄關で名札を出した。御承知の通り其玄關には廣いホールがありまして其處に三四十人の訪問者がじつと腰掛けて詰掛けて居る。是は皆大統領に會ひに來た男女の人々である。彼等は順繰りに大統領官房に往つて手を握つて敬意を表して歸る。私が名札を出すや否や玄關の奥の官房からルーズベルト氏が早足に走つて來て、玄關に佇立して居る私の所に來て私の手を握つて、

「君はなぜ早く來なかつたか。僕は君を疾うから待つて居た。なぜ早く來なかつたか。」

と出し抜けに言ふた。私も實は喫驚りした。さうすると其處に待つて居る三四十人の男女の訪問者一同は、一國の大統領が奥から走つて來て、

「君を僕は疾うから待つて居る。なぜ早く來なかつたか。」

ありますが、ちつぽけな黄色な人間に、一國の大統領が、さも親密らしくして居るのを見て、是は何者が来たかと怪しんで居る位である。さうするとルーズベルト氏は例の如く親密を示していきなり私の左の手をぐつと捲いて、道すがら、

「なぜ早く来なかつたか、疾うから待つて居つた。」

と言つて私を引張つて往つた。官房に入つて其處に坐ると、

「實はグリスカム公使が東京から電報を打つて来たから、君がアメリカに来ると

云ふことは疾うから知つて居た。今かくと待つて居つたが一向に来ない。一

體今迄何處に居つたのか。」

「今まで紐育に居つた。」

「なぜ早く来ないか。僕は待つて居つた。」

「さうか。」

「君は僕の嚴正中立の布告を讀んだか。」

と斯ふ向ふから聞いた。

「讀んだ。」

「どう思ふ。」

「失望した。」

「さうだらう。君が失望したらうと思ふから、僕は早く君が来たなら説明しようと思つて居た。實は日本の宣戰の布告が出て日露間に戦争が始まるや、アメリカ

の陸海軍の若い軍人は、今度の戦さは日本に勝たせたいから、吾々は豫備になつて日本の軍に投じて加勢しようと言ふ者が諸所に出て来た。以上の様な意見を宴會で食後演説をする者もある。そこで露西亞の大使が困つて、どうもお前の國の陸海軍の若い軍人共は日本最良と見え、日本軍に投ずると云ふやうな演

説を、彼處でもした、此處でもした。どうかあゝ云ふことは取締つて呉れろと懇請せられたから、止むを得ずあの布告を出したのだ。併し斯く言ふルーズベルトの肚の中は、日本に満腔の同情を寄せて居る。あれは露西亞大使の交渉があつたから大統領として外交上止むを得ず出したのだ。僕の肚の中とは全然違ふ。君に早くさう云ふ内情を話さうと思つて待つて居つたのだ。倂今度の戦争が始まるや否や、僕は參謀本部長に言付けて、日露の軍隊の實況、又海軍兵學校長に言付けて、日露の軍艦の噸數及び其實況如何と云ふことを、詳細に調べさせて、露西亞の有様、日本の有様を能く承知して居るが、今度の戦さは日本が勝つ。」

と言つた。

是は意外の話である。日本の陸軍當局も、海軍當局も、元勳も、勝つか負け

るか分らぬと言つて居るのに、縁の薄い米國大統領から日本が勝つと云ふことを聞かうとは思はなかつた。加之大統領は尙ほ語を續けて、

「勝たせなければならぬ。」

とも言つて其理由を述べて曰く、

「日本は正義の爲に、はた人道の爲に戦つて居る。露西亞は近年各國に向つて惡虐無道の振舞をして居る。特に日本に對しての處置は甚だ人道に背き正義に反した行爲である。今度の戦さも、ずつと初めからの經過を調べて見ると、日本が戦さをせざるを得ない立場になつて居る。依て今度の戦さは日本に勝たせなければならぬ。そこで吾輩は影になり、日向になり、日本の爲に働く。是は君と僕との間の内輪話で、之を新聞に公にしては困る。」

是は困る譯である。ルーズベルトは米國の大統領である。

「のみならず君はハーバート倶楽部員で、東京に於けるハーバート倶楽部の會長であるから、其ハーバート倶楽部の會長が今度米國に來たと言へば、亞米利加全國にあるハーバート倶楽部の會員は、日本に同情するに決つて居る。」と付け加へた。

「さう聞けば如何様さうだ。今の外務大臣小村壽太郎はハーバートに於て吾々と同時に卒業した。露西亞の公使で國交斷絶の爲引揚げた栗野慎一郎もハーバートの卒業生。仁川で第一番に海戦をした瓜生外吉氏は亞米利加のアナボリスの海軍兵學校を卒業した。斯く使命を持つて來た金子もハーバートの卒業生の一人である。四人の者は皆亞米利加の教育を受けて居る。亞米利加の教育の効能を今回の戦争に依て亞米利加人に示さなければならぬと吾々共は決心して居る。」
「其決心で君達がやれば此方に居るハーバート連中は、皆同情する。」

さう云ふ話を會見の初めに聞いた時と、曩きに三月の十一日桑港で局外中立の布告を見た時とは全然顛倒して、初めてルーズベルトの眞意が分つた。そこで直ちに公使館に馳せつけ、其話を英文に書いて、暗號電報で小村外務大臣に打ちました。此電報を見た日本の内閣各大臣や元老の人達が喜んだの喜ばないのルーズベルトが斯う言つたのは實に百萬の兵を得たと同じ事であると喜んだ人もあつた位ださうであります。程なく小村大臣から私に暗號電報を打つて來た其電文に依れば、

「君と大統領との會見は豫想外の好結果である。大統領と君との話を歐羅巴・支那・南亞米利加に居る日本の公使には悉く暗號電報で通知して、亞米利加大統領の態度は斯う云ふものであると云ふことを公使達に通ずることにした。」
と日本政府では餘程あの大統領の話を嬉しがつたと見える。實は當の私もかう云

ふ事迄もルーズベルト氏から聞かうとは思はなかつた。唯ルーズベルトに頼んで最後の調停をして貰はうと云ふ位の所であつたのが、向ふから唐突に今度の戦さは勝つ、又勝たせなければならぬと云ふ確信を私に言つた時には、私とても實に百萬の兵を得たよりも有難かつた。

それから公使に伴れられて外務大臣のジョン・ヘー氏に會つた。ジョン・ヘーに會つたときに、私は日本に居る米國公使グリスカム氏からジョン・ヘー氏に宛てた紹介狀を貰つて往つた。會つて直ぐに其書狀を示した。ジョン・ヘー氏は之を受取つた儘其處に置いて披いて見やうともしない。一體外國に往つて紹介狀を持つて行けば、其書狀を見て此人はどう云ふ人だと云ふことを知つて、それから言葉を変すのが恒例になつて居る。然るに私が持つて往つた亞米利加公使のグリスカム氏の紹介狀を見ずにそこに置いて、私の顔をしげくと見てゐる。

「貴下は紹介狀の要はないではございませぬか。紹介狀は持つて來るには及ばぬぢやありませんか。」

と言ふ。さあ喫驚りした。

「實は私は甚だ記憶に乏しいが、貴下には未だ會つたことはないと思ふから、紹介狀を貰つて來ました。」

「貴下は御承知ではあるまいが、私は貴下には既に十四五年前に會つて居る。其頃私は微々たる新聞記者であつたから、貴下の腦裡には残らなかつたらうけれども、私の方では貴下を克く知つて居る。」

私は又喫驚りした。

「私はヘンリー・アダムス氏の所で貴下に御會ひした。其時貴下は各國の議院制度を調べに御出でになつて、歐羅巴を廻つて歸りに華盛頓に御出でになつた。」

さらして親友のヘンリー・アダムス氏の所の晩餐會で私は御會ひしました。此言葉を聞くや私は直覺して舊時面會した事を思ひ出し、

「それぢや貴下は曾てリンカーンの秘書官として南北戦争中大統領リンカーンの側に居つた縁故に依りリンカーンの傳を御書きになられたあの御方ですか。」

「それです。私はあの時新聞記者であつたけれどもリンカーンの傳を書いて居つたアダムス氏の晩餐會で貴下と色々日本の憲法の事や米國議會の話をした舊友ぢやないか。紹介状を持つて來るに及ばぬ。」

と言ふ。成程それならば添書は要らぬ譯である。それから色々話をした所が外務大臣ヘイが言ふことが面白い。

「一體今度の日露の戦争は、日本が亞米利加の爲に戦つて居ると言つても宜い。それはどう云ふ譯か。」

と聞くと、

「私は外務大臣として支那に向つては門戸開放、機會均等と云ふことを宣言した。それを露西亞が門戸開放をせずして滿洲には外國人を入れぬ。滿洲に於ては機會均等ではない。滿洲は露西亞の勢力範圍として、亞米利加の商人も入らない。而して日本は滿洲も矢張支那の一部であるから、門戸開放をしる、機會均等をしると言ふ。此の結果が、今日の戦争になつたのである。詰り亞米利加の政策を日本が維持するが爲の戦ひであると謂つても良いから、今度の戦争は亞米利加人が日本に御禮を言はなければならぬ。のみならず日米の政策が今度の戦に就ては一致して居るから、亞米利加は日本に同情を寄せることは疑ひない。」

斯様に外務大臣が言つたので、是亦私に非常な勢援を與へた。そこで是も亦直ちに暗號電報で小村外務大臣に通報した。

それから今度は海軍大臣に會ひました。勿論陸軍大臣のダフトとは、従前米國に居た時度々會つて居る。加之、非律賓總督として往來するときに日本に立ち寄つたから、其時日本でも度々會つたので、是は會ふ必要はない。海軍大臣に面會する爲に高平公使に伴れられて海軍省に往つた。さうした所が「是が海軍大臣」「是が金子」と高平公使が紹介すると、海軍大臣が私の顔を見て、

「君は俺を忘れたか。」

と言ふ。

「私は君を知らないと思ふ。」

「君と俺はハーバートの法科大学で同級生ぢやなかつたか。夫れを忘れたか。」

「あの時にビレー・ムーデーと云ふ跛のムーデーが居つたことは知つて居る。」

「其の跛のムーデーが俺だ。」

と云つた。

跛のムーデーと云はれる譯は、ムーデーは其頃ベースボールのチャンピオンであつたが、右の膝頭を打つて非常な怪我をしてから、跛になつて、學校に来るのに松葉杖をついてやつて来て居つたから「跛のムーデー」と言つて居つた。

「今見れば君は跛は引かないではないか。」

「それは昔の事だ。今は癒つて此通りだ。」

と云つて膝を叩いて見せた。

「それならば是から俺は君に色々聲援して貰ひたいことがある。」

と云ふやうな譯でありました。

斯う云ふやうに舊友を外務大臣に持ち、又海軍大臣に持つて居つたのは、非常に私には大きな力であつたのです。此時私は外交は如何に日本で偉い人でも、

其使命を持つて行く外國に友達がなかつたならば決して甘く行かないと云ふことをつくつく感じた。友達がなくなつて素手で外國に往つて雄辯を揮つて、俺は日本では元老だ、大臣だと言つて威張つて見た所が三文の値打もない。眞に頼る所のものは其國の親友であると云ふことを痛感した。

或る日曩きに外務大臣が話した舊友のヘンリー・アダムスが私を晩餐に招待して、大勢の友人に紹介した。其時此人の言つたことを皆さんに知らせたい。ヘンリー・アダムスと云ふ人は、先祖が二代大統領になつたジョン・アダムスとジョン・クインゼ、アダムスである。ヘンリーは此名門の子孫であります。而して彼は外交官になつたことはないが、外交問題に精通した學者である。外務大臣ジョン・ヘーの智慧袋と言はれて居る人である。彼の言ふ所に依れば今度の戦争は全く露西亞の宮中の大官と、陸海軍の軍人とが結託して朝鮮を取らうと云ふ策で、

此戦さが畫策されたのだ。夫れのみならず宮中の大官は、皇帝・皇后の信任を得て宮中に勢力のあるベゾブラゾフと軍人とを結託せしめて、實際、兵を一萬滿洲に送れば五萬も送つたやうに言つて日本を恫喝し全く脅喝手段で日本を屈伏させようと言ふ政策を執つて居る。又軍艦にした所で、日本を脅威する爲に旅順に送るのである。是れ唯脅喝手段で刃を動かさずして朝鮮を取らうと云ふのが彼等の策略である。それ故に日本が朝鮮を渡して宜しく願ひますと言つて平和を乞はなければ、到底日露の問題は解決しない。のみならず旅順に居る極東の太守アレキシーフと云ふ人は、宮中に非常に勢力のある人で、又貴族の仲間にも勢力のある海軍大將である。是が旅順に頑張つて居る。事實此アレキシーフの政略は、脅喝手段を以て海軍なり陸軍なりで、いざと言へば戦さをするを脅喝したならば、日本は一と縮みになるから、それで往けると思つたのが此人の政策である。所が國交

断絶するや否、仁川港に於てワリヤーク其他の軍艦が日本の軍艦の爲に打沈められたと云ふ電報が来て、露西亞の宮中の大官も、皇帝も皇后も悉く恐怖の念に侵かされて、非常に驚いた。こんなにも負ける積りはない。戦さをせずして、脅喝手段で嚇す積りで居つたのが本當の戦争になつた。其時の宮中の驚きと云ふものは非常なものであつたと云ふことを此人から聞いた。又彼は語を續けて一箇年此戦さが續けば、露西亞は必ず内から壞はれて来る。東洋に往つて居る兵士も本氣に戦さず積りて往つて居るのぢやない。恫喝手段の道具になつて往つて居るのであるから、一ヶ年日本が頑張つて居れば、屹度聖彼得から内輪割れがする。今日仁川の戦でワリヤークが沈んだので露國は、恰も大きな鯨が大洋に於て漁師の銛を頭に突込まれたやうなものである。まだ死んでは居らぬが、今や七顛八倒の苦しみをして居る。丁度大鯨が銛を受けたやうなもので、到底長くは生きては

居らぬ一年我慢しなさい。さうすれば必ず芬蘭又はあの方面から内亂が起つて、到頭露西亞の方から講和談判をしなければならぬやうになるから、其事は今私に貴下に言つて置くから能く記憶して貰ひたい。

又聞く所に依れば、日本は今度の戦さに就て上は天皇陛下から下は匹夫匹婦に至るまで、舉國一致で戦ひをして居ると。之に反して露西亞は舉國一致でない。恰も内亂の起るやうな國にして又人心も離散して居る。故に今度の戦争は日本が小國と雖も勝つに決つて居ると私は思つて居る。是は吾輩の獨斷ではない。吾輩は歐羅巴の形勢殊に日露の形勢は數年間研究した。露國の人にも會つて聞き、露西亞の内情も詳しく調べ、又日本の事情も調べて居る。舉國一致の日本が勝つに決つて居る。併し勝つことは勝つが、茲に一つ日本政府に忠告したい事がある。其事は露西亞は先年猶太人をキシネフ其他で虐殺して居る。所が歐羅巴の猶太人

は吝嗇で金持で、金権を握つて居る。露西亞は軍費を今は佛蘭西から借りて居るけれども、是は長くは續かない。さうすると結局佛蘭西・英吉利・獨逸に居る猶太人から借りなければならぬから、早く日本政府では猶太人を懐柔して、金権を握つて居る猶太人に對して露西亞に金を貸すなと云ふことを言へと彼は忠告した。是が即ちシフと云ふ猶太人が歐羅巴に於て、高橋是清と談判して、第一公債、第二の公債をシフの手を経て募集したことに符合して居る。日露戦争に就ては猶太人は露西亞には一文も貸して居らない。猶太人が露西亞人に貸さないのに反して日本には莫大な軍費を貸した。是は猶太人が露西亞に於て非常な虐待を受けた復讐であらうと思ふ。

尙ほ日本に忠告したいことがある。夫れは早く芬蘭、及び瑞典の地方に日本から密使を送つて、芬蘭人を煽て、瑞典人を煽動して、彼の地方に内亂を起させ、

さうして露西亞の背後を衝け、西伯利亞に兵を送らうとしても、芬蘭・瑞典の國境に内亂が起れば、其の方に兵を遣らなければならぬから、日本と芬蘭と兩方に兵を分割して送ることは露西亞の痛手である。さうすれば露西亞に内亂が必らず起る。其煽動の費用は二三百萬圓もあつたら宜からうと思ふ。軍艦一艘沈めたと思へば安いものぢやないか。海戦をせずして露西亞に騒動を起させ得るならば、軍艦一艘の値段は安いものぢや、二三百萬圓使つて、早くあそこに密使をやつて搔き廻はせ、と云ふことをヘンリー・アダムスが私に言つた。加之どうか日本政府に此事を言つて貰ひたい、と申しますから、私は直に此事を詳しく書面に認めて桂總理大臣小村外務大臣連名にて郵送した。其後各方面の報告に依れば公使栗野慎一郎が露西亞を引揚げると同時に、公使館付の陸軍の中佐をして居つた明石元二郎と云ふ人を、佛蘭西に滞在させて、芬蘭、瑞典、挪威に手を廻はして、



色々掻き廻はしたと云ふことを聞きました。其事は明石元二郎氏の傳にも書いてある。此献策をしたのはヘンリー・アダムスが私に會つて言つたのが初めてである。先づ斯の如く華盛頓に往つて見ると、大統領・外務大臣・海軍大臣、それから外務大臣の智慧袋と言はれるヘンリー・アダムスも、斯の如く日本に同情を寄せて居ると云ふことは、實は桑港に上陸した時とは、丸つきり違ふ。又日本を出る時、伊藤公に今度の亞米利加の使命は私は成功の見込なしと言つたけれども、是だけの同情者を得たのは、非常に私をして力強く思はせた。それからまだ色々のことを申上げますれば澤山ございますが、それは省きます。茲に一二面白い話を致しませう。

廣瀬中佐が旅順の港口に船を沈めたことが、ドシ／＼電報で米國に來て新聞紙に載る。千八百八十八年に西班牙と亞米利加が戦争をした時に玖馬の港の入口に

船を沈めて西班牙の軍艦を封鎖し、亞米利加の海岸を荒らさぬやうにしたのが、亞米利加の海軍大佐のホブスンである。そこで同じく旅順の港口に船を沈めた廣瀬中佐は、我が亞米利加のホブスンの故智を學んでやつて居るから、亞米利加が日本に教へたのであると云ふことを得意になつて書き立て、廣瀬中佐の旅順港口に船を沈没せしめたのは、恰も米國の戦策を行つたやうに喜んでゐる。手前味噌ではあるけれども、是は日本に取つては好い宣傳であつて日本に同情を寄するこゝとなつた。

それから私は一夜友人に誘はれて華盛頓の芝居を見に往つた。幕間に幕が下りる。さうすると其幕の中央に露西亞の皇帝の半身像が、大きな形で緞帳に寫る。幻燈で露西亞の皇帝の半身像が緞帳一杯に見えると、見物人は「引つ込めろ。」「引き卸ろせ。」と異口同音に言つて、靴でフロアーをドタ／＼させて引つ込めると言

ふ。そこで引つ込める。と云ふやうに少しも喝采しない。露西亞皇帝は非常に不
 評判である。そして其次にぼつと出たのが我が 天皇陛下の半身像。すると満場
 拍手喝采で、萬歳々々と言つて、耳をも撃く程の喊聲が湧いた。して見ると華盛
 頓の普通の芝居小屋の見物人も、日本に同情を寄せて居ると云ふことを見た時に
 は、私は非常に嬉しかった。

まだ大分ありますけれども、餘り長くなりますから、もう十分間程御猶豫を願
 ひたい。是から先きは政治論でも何でもない。又見掛けますと御婦人も居らつし
 やる様ですから、御婦人に私は聞いて貰ひたい事がある。それは四月六日に華盛
 頓でウォルダーと云ふ非常な金持の後家さんが私の友人の大審院の判事ホームス
 を通うして、私を晩餐會に招きたいから来て呉れると言ひました。此後家さんに
 は二人の美人の娘さんがありましたして華盛頓の交際社會では有名な人達であつた。

けれども女の事だから、男の紹介なしでは私を案内する事が出来ぬので、ホーム
 ス氏を通して私に晩餐に来て呉れると言つた譯である。私はどんな人でも招か
 れれば行く。黒奴でも靴磨でも一人でも多く日本に同情を寄せさせたい況んや華
 盛頓の交際社會で隆々たる勢力のあるウォルダー夫人と二人の娘の招待であるか
 ら喜んで往くと返事した。其晩の食後に總領娘が私に聞きたいことがあると言
 ふ。

「實は此二三週間前、或る晩餐會で露西亞の大使カシニ伯爵に會つた。所が露西
 アの大使が列坐の人々に向つて言ふのに「戦争は始まつたが、日本の陸軍など
 云ふものは、露西亞の陸軍に比較すると迎も敵對は出来ない。見て居て御覽
 なさい、一二箇月の内には、日本の軍隊は可哀さうだが皆全滅する。其譯は露
 西亞の軍隊の訓練と云ふものは斯うである。野營をして居る時でも、又兵營に

居る時でも士官と兵卒とは殆ど親子兄弟の如く親密である。皆車座となつてウ
 オツカといふ酒を飲んで、階級の差別はない。兵卒が唄を歌へば、士官が樂
 器を鳴らす、獨りて踊るもあれば、相携へて舞ひ廻るもあり其團樂の愉快なこ
 とは、世界各國の軍隊に類はない。併し此軍隊に一旦進軍の命令が下つて、敵
 に向つたならば、殆ど別人の如く兵卒は猛獸の如くなつて、如何なる敵と雖も
 蹴飛ばして行く。其の勇猛なことは平時團樂して愉快に酒を飲み歌ひつ舞ひつ
 した時と丸つきり變つたものである。見て居て御覽なさい。今度日本の軍隊を
 追ひ捲くるのは譯はない」と傲然として言つた。私は眞實日本に同情を寄せて
 居る一人でありますが、此言を聞いて日本の兵隊が負けはせぬかと心配でなら
 ぬから、貴下を御招待して日本の軍隊はどう云ふ風に訓練をなされて居るのか
 此の猛獸の如き露兵に當らなければならぬので定めて困難でありませうが、ど

う云ふ訓練法になつて居りますか。」

と單刀直入に質問を發して來た。一坐の面々は此の突然の質問に如何に私が答へ
 るかと私の顔を見詰めて居つた。そこで私は當意即妙と云ふ筆法で、直ちに答へ
 た。

「いかさま露西亞の兵隊の訓練はさう云ふ情況であることは私も豫て聞いて居る
 が、併し日本の軍隊の訓練は其れとは少し違ふ。日本の軍隊は兵營に於て毎朝
 訓練をする前に集合喇叭を吹く。さうすると兵隊が一小隊づゝ訓練場に並ぶ。
 さうして少尉が劍を抜き其前に立て號令を掛ける「氣を付け、本官が此劍を抜
 いて命令するのは 天皇陛下の命令と心得ろ。此劍は 天皇陛下を代表するも
 のである。我が 天皇陛下の軍隊は吾輩が此劍を握つて號令することは凡て陛
 下の命令と心得て、如何なることを命令するとも必らず之に服従せよ若し戰場

に於て吾輩が鐵砲の彈丸で斃れたならば、下士官直ちに此劍を取つて號令せよ。若し又下士官が戦死したならば兵卒之に代はれ。一兵死せば一卒之に代り、かくして代り／＼して最後の兵卒に至つて此の劍を握つて地に倒れて死ぬのが日本の軍隊の精神である」と斯う云ふ具合に日本では軍隊を訓練して居る。皆さん日露の兩國、どつちが勝つてせうか。」

と言ふと、列坐の人々一齊に手を拍つて、
「日本が勝つに極まつて居ます。」
と言つた。此事に付て私は米國から歸つて來て一言言つて置かねばいかぬと思つて、寺内陸軍大臣に逢つて、

「俺は亞米利加に於て日本軍隊の訓練法を聞かれたので斯く斯くと答へた。若し俺が嘘を吐いたと云ふことになつては洵に困るから君に一つ確めるがどうだ。」

と云つて、前に述べた當意即妙の答辯を話した。所が、

「それは實に其の通りだ。君の言つた通りの精神で軍隊を訓練して居る。」

「さうか、それで俺も安心した。」

と言ひました。

私の答辯を聞き終つた後ウオルダーの長女は更に話を續けて曰く、

「其御話で能く分りました。それからもう一つあなたに御願ひしたいことがあります。」

「それはどう云ふことですか。」

「只今滿洲に居る露國の兵隊が二三十萬居りませうが、是から先きどん／＼歐羅巴から輸送して來る。此の輸送はモスクワからハルビン迄は單線である、單線で兵隊を送るからあれを壊したらどうです、バイカルの橋とか、レールを壊せ

ば宜いから、私はあなたからさう云ふお話を聞いて見れば、是から直ちに露西亞に行き、露西亞にて極めて貧乏な娘の妻れた姿に變装して、さうしてサイピリヤに這入り込み、爆彈を隠して持參して、さうして彼處へ這入り込む、私は女だから決して男のやうに間牒として疑はれまい、どうか斯うか胡魔化してサイピリヤに行つて、さうして私がダイナマイトで鐵橋の橋とか重要な線路を皆壞す。さうして私が若し生捕られたならば、私は殺されても宜いから、どうか日本の皇后陛下にウオルダーと云ふ娘が日本の爲めに身を妻してサイピリヤに行つてダイナマイトを持つて行つて單線鐵道を壞し、露國の輸送を妨げて日本軍の爲を圖りたいからどうかさうさせて呉れど皇后様にあなたから願つて呉れ。」と云ふ。是又私は弱つた。是が亞米利加人の率直な所であり、又それが可愛い所である。私は「それはあなたの日本の爲めにそれ程迄に御熱心な應援をして下さ

ることは有難い。併し能く考へて御覽なさい。我皇后陛下に於ては妙齡の亞米利加の婦人を間牒として國際法の犯罪人となつても宜しいと云ふことは陛下に於ては決して御許しはなからうと思ふ。中々御徳高々しい御方だから間牒になれ、國際法の犯罪人に亞米利加の婦人をするに云ふことはそれは私が御願ひしても御裁可になるまいと思ふから、御止しになつた方が宜しからう」と云ひますと、それならばどうか私の願ひの事丈けを内奏して私の寫眞だけでも皇后様に献上して下さい、と熱心に頼まれたから斷ることも出來ず、それなら寫眞に自分の名を書いて持つて御出なさい、私から皇后様に献上しませうと云ひました其後其寫眞を添へ當夜の模様を詳しく書面に認めて香川皇后宮太夫の手を以て皇后陛下に奉つた。所が數十日の後香川太夫から皇后陛下に献上し御満足の由通知がありました。私が華盛頓に居るときに、露西亞の大使カシニ一伯の娘のカウンテス・カシニ

「露西亞では御承知の通り、母が死ねば、其長女が皇帝の許可を得れば母の如く伯爵夫人と言つて宣しいのです」此カウンテス・カシニーは非常な交際社會での花形である。華盛頓の交際社會でカウンテス・カシニーと言へば頗る勢力がある。是が主催になつて華盛頓の露西亞大使館で園遊會を催しバザーを開き、さうしてバザーの賣上金は露西亞の赤十字社に寄附して傷病兵の救恤に當てさせる。其バザーの發起人はカウンテス・カシニーであつて、米國の内閣大臣方の夫人や上下兩院議員其他知名な人の奥さん方が、何十人と云ふ多數が賛成人になつてゐる。此バザーの賣品は佛蘭西から贅澤品其他米國の女の好きさうな品物を取り寄せて賣る。其代價の安いことは當然である。何故なれば露西亞の大使館で取寄せから税關は無税である。普通ならば亞米利加に輸入するには六割とか十割とか輸入税が掛る。香水でも白粉でもハンケチでも十割は掛つて居る。それが無税で

來るのだから非常に安い。だから亞米利加の交際社會の婦人を凌るに極まつて居る。若い女も年寄も此の日を待ちに待つて居つた。此催を私が聞いたから私は大統領又は外務大臣に直かに言はないで、兩人と懇意な人に向つて話した。「米國政府は露西亞の大使館でバザーをすることを知つて居るか、あの發起人は大使のお嬢さんであるが、賛成者は内閣大臣の奥さんや上下兩院議員の奥さんや、其他有名な人の夫人方がある。さうすると是は國際情誼に差支ないと思へる。それでは金子も亦日本から美術品をどつさり取寄せて、さうして日本の公使館に於てバザーを催して、其賣上金は日本の赤十字社に送らうと思ふ。其時には此賛成人になつて居る奥さん方に皆賛成して貰はうと思ふ。露西亞のバザーに賛成するなら日本のバザーにも賛成せざるを得ない。」と言つた。所が其人は大に弱つた。

「もう二度と此様な事はやらせぬから今度は大目に見て呉れ。」
 と言つた。然るに天幸と言はうか、バザールの當日が非常な大雨。翌日に延ばした
 けれども矢張大雨。到頭三日目にも雨が歇まないから園遊會は出來ず僅かに大使
 館の家の中で、形計りのバザーを催し、其の賣上代金が一萬七千弗、實は何十萬
 弗も賣る積りであつたけれども、降雨であつたから一萬七千弗しか無かつた。そ
 れを發起人から露西亞の赤十字社に送つた。送つたと云ふ郵便は着いたけれども
 現金は一文たりとも届かない。是は中途で何人かが皆自分の懐に入れてしまつた
 ので、赤十字社に一文も往かなかつたと云ふことを後で聞いた。斯の如く腐敗し
 て居つたから、露西亞が負けるのは尤である。

それからもう一つは、私が華盛頓に居るときにメソヂストの宗派（此處にも同
 宗派の人が居らつしやるか知りませぬけれども、事實であるから申上げます）メ

ソヂストの宗派のハミルトンと云ふ牧師が、日曜日に教會堂で説教をした。其要
 旨は今や歐羅巴亞米利加は世界の平和を祈つて居る。故に豫てから軍備を制限す
 ると云ふことを主張して居る。さうして其制限した軍備の剩りの金は悉く平和的
 事業の爲に遣つて居る。然るに茲に世界の平和を破る國がある。是れは日本であ
 る。日本は東洋に於ける歐米の文明の敵である。故に歐米諸國は自國の兵力を制
 限して其剩りの金を以て東洋に往つて日本を撲滅しなければ、歐羅巴と亞米利加
 の平和は保てぬ。又東洋に耶蘇教を傳播するには日本が存在して居つては出來な
 い。日本は耶蘇教の敵である。耶蘇教の敵であると同時に歐米の文明の敵である
 と云ふ演説を臆面なくしたことが、翌日の新聞に載つた。是は怪しからぬと思つ
 て、私は其新聞の切抜を取つて置いた。一體耶蘇教の牧師として日曜日に斯う云
 ふことを説教するのは以ての外である。果して日本が平和の敵であるか、耶蘇教

の敵であるか、私は一言の辯解をしたいと思つたが、さう云ふことを華盛頓の新
 聞紙上で牧師と議論をするのも大人氣ないと考へたので、黙して紐育に歸つて來
 た。紐育には當時石川と云ふメソヂスト派の日本人の牧師が居つて、日本人間に
 メソヂストの宗教の説教をして居つた。其人が一日私を來訪したから其切拔を出
 して、

「之を見る、お前の同宗派のハミルトンは斯う云ふ演説をしたが聞捨にならぬ。

お前は同派だから是からハミルトン氏の許に往つて私の意見を言へ。若し此演
 説が本當ならば、日本には以後メソヂスト派は入れること相成らぬ。今や日本
 は國を賭して戦をして居る時に、斯の如きことをメソヂスト派の牧師が言ふな
 ら、メソヂストの宗派は日本には害ありとして、此宗派は俺が力の有らん限り
 追拂ふから。」

と言つた。すると石川は往つて其通り言ふたらしい。丁度其時に青山學院の監督
 のハリスが米國に居つた。ハリスと云ふ人は實に温厚な立派な人格者ですが、其
 事をハリスが聞いて私の旅宿に來て、貴下の御怒りになるのは尤である。あの牧
 師は餘計な口を叩いたのであるから其事は私が取消させます。どうか我慢して下
 さいと言ふ。それからハリスはメソヂスト派の會合を開いてハミルトンに謝罪さ
 せ、且つ其演説を取消してメソヂストの會報に之を載せ、私の所に其會報を持つ
 て來て示し、是で我慢して呉れる、と言つたから私は、

「宜しい、それならば俺は承知しよう。」

斯う云ふやうな事もございました。

是に於て私は何處に根據地を極めようかと云ふことになつて、華盛頓にしよう
 か、紐育にしようか。華盛頓に私が根據地を定めると私の舉動を各國の外交官が

偵察する。ルーズベルト氏に會へば直ぐ其事が何であつたかと探る。然らばルーズベルト氏にも氣の毒である。又私の背後には色々な探偵が付き纏ふから、外交官の居る華盛頓は宜しくないと思つたので、結局紐育を根據地にするに決した。紐育ならば中央政府の在る場所ではないけれども、商業・工業・政治、其他總ての事に就て此處が中心であるから、此處に根據を据へて、東西南北に活動しようと思ふことに極めた。一日ルーズベルトに會つて、

「僕も今迄華盛頓に居つたが、今後は紐育を根據地にしようと思ふ。」

「それが良からうと思ふ。君が僕の所に來ると、露西亞の大使や佛蘭西の大使が來て、金子はどう云ふ話をしたかと言つて、五月蠅くて仕方がない。紐育に居つても電報もあり、又電話で話も出来るから用事は辯ぜられる。華盛頓に居ることは君の爲にもならぬし、又僕の爲にもならぬから、紐育に往つた方が宜か

らう。」

と云ふことになりまして、私は華盛頓を去つて紐育に參りました。さうして紐育を中心として多方面に活動致しました。

最早是で話が二時間以上になりました。洵に盛暑の際に皆様が斯く靜肅に御聞き下さつたことを私は非常に喜びます。又斯くまで皆様が謹聽して下さつたと云ふことは、私に取つて名譽と存じます。實に盛暑の際御氣の毒でありました。厚く御禮を申し上げます。(拍手起る)

第二回

日露戦役當時に於ける
我邦内外の事情上

建武内侍の奉謝上
日露御役當時の事情

二回

諸君、實は休暇前に府立一中の講堂に於きまして、日露戦役の回顧談を致しました。所が、其日は暑氣が最も甚しい上に二時間以上の長演説を致しましたから、御聴き下さつた御方には定めし御迷惑であつたらうと洵に恐縮に堪へませんでした。然るに帰宅致しました所が、田中君から随分暑かつたけれども、皆さん御退屈もなく御聴き下さつたし、尙あれでは中途で演説を止めた形だから、其先きをどうか續けて貰ひたいと云ふ御希望だと云ふことで、私の一場の談話を皆さんの御聴きに入れて又續けると云ふことなら、私は喜んで昔嘶を致しませうと快く御請をした。それから先般來段々御相談の結果、今年は暑中涼しかつたか九月の初めも案外涼しからう、それらで七日と十二日に都合は出来まいか、とのことであつたから、七日なら宜しうございますと言つて今日罷出た次第であります。然るに今日は又此前に劣らず甚しい暑氣であなた方には、一度御聴きなさつ

日露戦役當時に於ける我邦内外の事情 上

た其先きを又同じやうな暑い日に御聽き下さる譯で甚だ恐縮千萬に存じます。御約束致しましたから其續を申上げて、御參考に供したいと思ひます。併し只今田中君の言はれたやうに、動もすれば思想險惡の傾になり勝の今日に於て私の話が果してそれに適當なる防遏演説であるかどうかは存じませぬが、其點は皆さんの御判斷に委せるの外なく、唯私は事實は事實、有の儘に申上げて見たいと思ふのであります。

扱先般御話した最後は、私が紐育を以て活動の中心とすると云ふ考を以て華盛頓から紐育に來たと云ふ所迄御話しましたが、今回は如何にして紐育から亞米利加全般に向つて日露戦役に於ける日本の立場を宣傳したかといふ點を御話したい。心窃に以上の様な計畫をして居る際に、私の舊友のウードフォードと云ふ人が（此人は嘗て西班牙の公使として亞米利加から彼國に往つて居つた、軍人

出身の外交官で、陸軍の中將である。此人は軍人としてよりも寧ろ外交官として知られて居る人である。日露戦争前に大統領の命を承けて日本に來られて、伊藤・井上・山縣・松方其他の元老と再三會つて日本の状況を聽き、又私にも大統領の添書を持つて來て、色々日本の事情を聽かれたから、日本滞在中に日本の事情をすつかり話して聽かした關係があつたものですから、私が亞米利加に往くや、「貴下は今度國難の際、重任を負つて亞米利加に來たのだから、自分が嘗て日本に往つた時には大變厄介になつたから、私も一臂の力を藉さう、それにはどうしたら宣いかと言へば、私の考では朝野の名士を一堂に集めて晩餐會を催して其食後に貴下が日露戦役の沿革から日本人民の希望、及び態度等を詳しく説明したならば如何なものでせう。さうすれば集まる人数は少數でも、其演説は翌日の新聞に載つて亞米利加全般に知れ渡り、貴下の意志が米國人に徹底するか

ら其宴會を催さうと思ふから来て呉れる」

とかう云はれた。そこで私は喜んで参りませうと答へました。

其宴會は四月の十二日と定めました。前の内閣大臣——(當時の内閣大臣は嚴正中立の立場にある關係から之を避けて招ばなかつた)。陸海軍の將校・各裁判所の判事・大學總長・商業會議所の會頭・實業家・銀行家・新聞記者・其他朝野の名士を網羅して二百十九人、紐育のユーニバシチー・クラブ——大學俱樂部に招びました。其中には態々桑港から来た人もある、又英領加奈陀から来た人もある。先づ是は此の當時の聽衆としては最も適當なる人であつて、此一人が何百人にかに宣傳することの出来る社會に於て重要な位置を占めてゐる人々である。二百十九人の人をユーニバシチー・クラブに招んで、而して主催者のウードフォード中將が私を招待した理由を述べられ、それから前の内閣大臣の中でも大藏大

臣、それから陸軍大臣・大審院長・商業會議所の會頭・大學總長・外交官等が交々演説をされた。それを一々申しますと長くなりませうから、それは申しませぬ。詰り今度金子と云ふ人が日本から来たのは、日露戦役の爲に亞米利加人に日本の態度を説明する爲であると云ふのが其の骨子であつた。其の他色々有益な話があつた。そこで私が之に對して日露戦役の原因から當時の情況、それから日本國民の決心の程度を詳細に述べました。最後に私は、四月の十日に旅順港外に於て露西亞の海軍大將のマカロフが日本の水雷に掛つて戦死したことに就て申しました。それが前々日のことであつて當時は噴々としてマカロフの戦死のことを新聞に書いて居る際であつた。此マカロフと云ふ人は海軍の將校として度々亞米利加に来て、此二百十九人の中の半分位はマカロフを度々招んで宴會をしたり、又は面會した人々であつた。多くは其友達である。又マカロフ大將の書いた戦術

論は世界に於て名高い著述で、是は英文にも翻譯されて亞米利加の海軍大學では教科書にさへ採用した位である。又日本の海軍大學でも日本文に譯して盛に讀んで居る。斯う云ふ有名な戦術家である。此人が旅順に居つて艦隊を指揮して居れば日本恐るゝに足らぬと言つて露國政府が特に選んで旅順に寄越した。それが不幸にも戦死したから、露西亞に取つては非常な打撃である。又亞米利加人も舊友が斯く悲惨な戦死を遂げたから、哀悼の意に充滿されて居る際である。其時に當り私は演説の終に臨んで不圖其事に考へ及んだから斯う言つた。

「此處に御列席の多數の御方はマカロフ大將を御承知であります、大將は世界有数の戦術家である。此人が死なれた。吾國は今や露西亞と戦つて居る。併し一個人としては洵に其戦死を悲む、敵ながらも吾輩は此マカロフが死んだのは露西亞の爲には非常な不幸であると思ふ。又マカロフ大將も國外に出て祖國の爲

に今や將に戦はんとする時に臨んで命を落したことは残念であらうが、此戦役に於て一番に戦死したことは露國の海軍歴史の上に永世不滅の名譽を耀かしたことであらうと思ふ。私は茲に追悼の意を表して以て大將の靈を慰める」

と云ふことを言つて私の演説を結んだ。是が翌日の新聞に出て非常な評判となつた。是より先きカシニ大使は日本の悪口を有りと有ゆる形容詞を以て吹聴し、又今度私が米國に來たに就ても非常に脅威を加へて居る。然るに此の如く悪く言はれて居る日本人のこと故、

「マカロフが死んだに就ては良かった。もうあれが死ねば日本の爲には幸福だ」と言ひさうなものが、却て敵將に對し追悼の意を表した上にマカロフ大將は露國の海軍の歴史の上に赫々たる名譽を永久に残すであらうと言ふて其靈を弔つた、日本人と云ふものは吾々歐米の人が考へることが出來ない高尚な思想を持つて居

るものだと言つて、それが非常に新聞紙上で賞讃された。是が私がアメリカで日露戦役に關する演説をした始めてである。之は日本の金子が何の爲に米國に來たかと云ふことを知らしめた紹介者が良かつたから、大に効果があつた。

其次は四月二十八日、是は私が八年間アメリカに居つて、内最後の二年間修學したハーバート大學の催で、私に來て日露戦争に就て演説をして呉れるとの招待を受けた。所が不思議なことには私と同時にハーバート大學を卒業した者が三人日露戦役に關係して居る。小村壽太郎は當時の外務大臣として日本に居つて、日露戦役の當初から關係して居る。又栗野慎一郎は露西亞に公使として彼地を引揚げて歸つて來た。さうして私がアメリカに來て日露戦役の沿革を説明して居る。斯様にハーバート出身の者が日露戦役に三人まで關係して居るからは、是非私に來て呉れよと言ふ。最初はハーバート大學が私を招ぶ積りであつた所が、總長の

考で、嚴正中立を布告して居るアメリカ合衆國の大學が、露西亞の敵たる日本人の金子を招ぶと云ふことは、假令卒業生と雖も是は遠慮すべきことであると云ふので、ハーバート大學の中に設けられたる俱樂部がある。其俱樂部から私を招ぶことにした。大學と云ふ公の資格でなく、ハーバート俱樂部が私を招んだ。然るに二十八日は非常な大雨で、午後からもう土砂降り。是では迎も誰も聴衆は來まいと思ふ程のなか／＼の大雨で少しも歇まない。其場所はハーバート大學の中のサンダース・シヤターと云ふ所で、是は卒業式に用ゆる會堂である。其處に私が往つて見ると、豪雨にも拘らず立錫の餘地もなく、何千人と云ふ男女が押詰め、押詰め這入つて來て、廊下にまで椅子を持つて來て聴かうと云ふ有様で、之を見た私は非常に愉快に感じた。それから「極東の現状」と云ふ演題で演説して、先づ第一に日露戦役の起因から説き始め十年以前に日本は日清戦争の時三國干渉の

爲に遼東を還附させられた。爾來日本人は十年の長い間、臥薪嘗膽して何れの時にか彼の遼東を元の通りに取戻さなければならぬと國民一般に決心したと云ふ沿革から説き始めた。所が三十三年の北清事變、即ちボクスス・ツラブルの時に、各國から兵を出した。歐羅巴各國も亞米利加も日本も兵を出した。露西亞地續きのハルビンから來て遼東を取つて了つた。さうして外の國は皆直ぐ撤兵したにも拘らず露西亞だけは何時までも撤兵しない。亞米利加が撤兵せよと言つても英吉利が苦情を言つても言ふことを聽かない。況んや日本如きが言つた位では、顧みもしない。日本では之に對し段々談判をしたが中々承知しない。そののみならず遼東から朝鮮に進んで京城までを露西亞の勢力範圍にする魂膽である。それは日本としては困ると抗議を申出た。斯う云ふことを擦つた揉んだして居る内に、彼は到頭しまいに釜山までを其の勢力範圍にしなければ承知しないと云ふから、我

國は已むを得ず二月四日の御前會議に於て逆も日露の交渉は外交談判ではいけな。已むを得ず國を賭し矛を執つて兵馬の間に此難問題を解決するより外ないと廟議決定し、天皇陛下の御裁可を仰ぎ茲に開戦するに到つたと云ふ沿革を事實と外交文書とを引證して詳細に私が演説した。所がそれが一時間半許も時間が経つて居つたから私は演説を中止した。なぜならば是より先き私が華盛頓を去つてハーバートの演説會に來る時に、私が嘗て留學時代に法律を教はつた人で今は合衆國の大審院判事であるホームズと云ふ人が言ふに、

「君は今度ハーバートで日露戦役に就ての演説をするさうだが、自分はポストンに住居してあつた時ハーバート大學で演説を度々した経験があるから君に一言忠告するが、ハーバート大學の先生達は無論。又ハーバートの所在のケンブリッジの市民、又其隣りのボストンの男女は、亞米利加第一等の知識階級の人と

自ら信じて居る。假令どんな偉い人が往つてハーバート大學で演説すると言つても、ハア、アレカと云ふて仲々聴かない。それで一時間ハーバートの聴衆を君が引着けて聴かせると云ふことは無理であるから、長くて四十五分、是より長く演説してはいかぬ、屹度失敗する、僕の経験に依つて君に忠告する」と華盛頓を去る時に言つたことを思ひ出した、所が已に四十五分はオロカ一時間半許も演説して居つた。そこで私はビタツと演説を止めて曰く、

「倅此豪雨の際遠路を厭はれず御出て下さつて、一時間餘も吾輩の未熟な英語の演説を御聴き下さつたことは洵に有難い。既に日露戦役の沿革と経過丈けを御話したが、餘り長く演説しても御氣の毒だから是で止めませう」と言つて打切らうとすると聴衆は總立になつて、ノー／＼と言ひ、思つて居る丈け言ひなさい。全部演説しなさい。今夜は貴下の演説を聴きに來たのだから夜が

明けても全部を聴かなければ歸らぬと云ひ出した。其時私は流石は曾て留學した母校であると思つて非常に嬉しく感じた。於是私は聴衆に向ひ然らば終りまで續けて、日本國民の決心と希望まで申上げますと、復た演説を續けた。今度は露西亞が如何にして西比利亞や滿洲に兵を送つたか、及びその兵數から、背後にある所の本國の常備兵の數を述べ、そして日本の兵隊の數を比較するとトテモ比較にならぬ程我軍は少數である。旅順・浦鹽に在る敵艦の噸數及び堅牢なる構造方法に就いて日本の軍艦を比較すると是亦比較にならぬ、此の通りだ。何處に日本が勝つ見込がありますか。又露國は土地の廣いこと、人口の多いことは世界に類がない。之に對して彈丸黒子の如き日本の小國が敵對すると云ふことは最初から勝てる見込は立たない。日本人中一人として勝つ見込を附けた者がない。勿論内閣の大臣も陸海軍の當局者も勝つ見込が立たない。併し露西亞に對して一

歩譲れば彼は一步進んで来て、飽くことを知らないのが露西亞の要求であるから日本は正義の爲めに已むを得ず國を賭して矛を執つたのである。若し此戦争で日本が亡びても、日本は少しも構はぬ、日本は正義の爲め、國を守る爲に國民皆矛を執つて戦つたが、奈何せん暴露の爲に亡されたと云ふことを世界の歴史の二頁に残せば満足する。後世の人が昔日本と云ふ國が亞細亞の東南に在つたが、暴露の爲に亡されたと云ふ歴史を知りさへすれば、吾々日本人はそれでもう満足だ。それ以上の希望はない。斯う云ふ決心を日本人は懷いて居るから、元々勝つ見込があつて戦争を始めたのではない。

又露西亞は曰く、露西亞は耶蘇教國で、日本は非耶蘇教國である。耶蘇教國が世界の非耶蘇教國を征服開化せしむることは天職だ。それに反對する日本を撲滅せしめなければならぬと言つて、今度の戦争を宗教戦に化せしめんとして居る。

此時に當り亞米利加の國民は耶蘇教信者であるから或は耶蘇教國の露國の言ふことに同意なされるかも知れぬ。併ながら私は耶蘇教の教義はさう云ふものではないと言つてバイブルの文句を朗讀し又サマリタンの宗教上の故事を引用して段々説明した。是の事實を亞米利加の人々が聞いて下されば吾々は他に何の望もないのである、是から先きは日露の兩國何れが是か非かは諸君の公平なる判断に委せまうと言つて演説を終つた。終つた時は最初から丁度二時間と十五分掛つた。聴衆は非常に緊張し、始めから終りまで靜肅に聴聞して拍手喝采して呉れた。翌日の新聞に其の事が出て、且つポストンの新聞には長文の社説を書きました。その社説は随分名文で書いてあります。それを一々申上げると長くなりますから申上げませぬ。又其の演説は電報で合衆國の諸新聞に通報して何れの紙面にも皆載りました。そこでハーバート俱樂部で之を印刷に附して小冊子にして、

ハーバート俱樂部の在る各州の都府にも送り、それから各種の協會・商業會議所を始め政治家、その他知名の士にまで送る爲に六千部刷つて配布されました。其の時聖路易に開會中の博覽會の當局者にミスと云ふ人がありましたが、此人は更に二千部を自分の金で印刷して、それを博覽會に關係して居る人々に配布しましたから、都合八千部刷つて亞米利加人に振撒いた。是で初めて亞米利加人は日露の戦役は斯う云ふものと云ふことが分りました。第一はウードフォードの晩餐會に於ける演説、第二はハーバート大學の演説會で、日本の態度が初めて米國の國民に分つた。私は其の時に坐るに感じた。亞米利加國民は最初は露西亞の大使の宣傳と新聞の買収とに依つてすつかり露西亞の方に引着けられて居たが、此二回の演説で露西亞側の言ふことばかり聞いてはいけぬ。又日本側の言ふことも聞かなければならぬ。兩國の意見を聞いて見るとどつちが尤かと言へば、

日本の言ふことも亦尤だと云ふことが云へると云ひ出して、夫れから少し頭を日本の方に傾けて聞くやうになつた。

其後は各地方から招待を受けて、南船北馬各都市の宴會又は演説會が始つた。蓋し亞米利加と云ふ國は打遣つて置けば宣傳する者が勝つ。嘘を言つても宣傳者が勝つから、他人の宣傳に委して置いてはいけぬ。向ふが宣傳でやれば此方からも宣傳をやらなければならぬ。併し決して偽を宣傳してはいかぬ。亞米利加人は正義を貴ぶ國民であるから正義のある方には必らず與みする。故に事實を言はなければ同情は得られない。斯う云ふ呼吸を呑み込んで私が演説したから其後は毎日々々大學からも呼びに来れば、商業會議所からも呼びに来れば俱樂部からも呼びに来れば、協會からも来る。乃至は個人からも呼びに来た。さうして茲にお可笑しいことにはカシニー大使は餘程それを氣にして本國に通報したものと見えて

五月十二日に突然露西亞のウートムスキ公爵と、ポトノスキー伯爵が紐育に來た。此二人が随行員二人を伴れて私の泊つて居るホランドハウスに投宿した。私の部屋の眞上の部屋である。故に彼等の足音が常に頭の上で聞える程であつた。是は私が諸處で日本の爲に演説したり、大統領に面會したり、朝野の人々にも會談するから、露國に於ても一つ對抗運動をしようと思ふので、露國の大使が本國に請求して來て貰つたのであると云ふことを米國人から聞いた。其の米國へ呼んだ人と云ふのはウートムスキと云ふ公爵で、露清銀行の總裁で、且つ東清鐵道の社長である。又一方、聖彼得堡の新聞記者もして非常な勢力を有する人である。殊に此人は明治二十四年に露西亞の皇太子に附いて日本に來た人で、大津に於て津田三造のために傷を受けられた露西亞の皇太子（即ち現今の露國皇帝）に非常な信用ある人で、あの津田三造の襲撃を目前に見た人である。又此人は非常な東

洋通で日本から歸つた後、皇帝の命を受けて東洋紀行を書いて出版し、續いて英文にも翻譯して出版した。實に東洋のことには最も明るい人である、斯う云ふ人が露西亞から米國に來て、私に對抗して宣傳しようと思ふ計畫である。夫れ故に私の頭の上に部屋を取つて、日本から來た金子を足下に踏付けると云ふ考であつたらうと私は邪推した。折々食堂に往くときなどには廊下で會つたが互に流し目に見るのみ。敵同士だから互に口も利かない。又紹介する人もない。併し向ふも私を知つて居れば私も彼を知つて居る。其の人は矢張有力なる紹介状を持つて來て、紐育・華盛頓・費府・ボストン等に於て有力なる米國人に會つて見た。けれども一人として演説會を開いて露國の事情を米國人に聽かせようとするものがない。到頭一度も公開演説をせず、悄悄として紐育から、露國に歸りました。そんな具合に露西亞側でも敗けずにやりました。もう此時には亞米利加の大半は

日本に同情を寄せて居りましたから、露西亞の方の運動は少しも効力がなかつた。

然るに五月十八日には非常な悲惨な事が起つた。即ち軍艦初瀬・八島が旅順港外に於て露西亞の敷設水雷に掛つて沈没したと云ふ電報が来た。紐育の新聞は大きな見出しで書く。又何人死んだ、どう云ふ船だと云ふこと迄詳しい電報が露西亞の方から歐羅巴を廻つて米國に来る。所が日本からは一本の電報も来ない。亞米利加の新聞には初瀬型、吉野型とある……あとで聞けば吉野に非らず、八島であつた。是は旅順の砲臺から露國人が雙眼鏡で見たら吉野に似て居つたから吉野と思つたのである。倭此の二艘が沈めば、もう日本の海軍は一角が壊はれたと云ふので非常に喜んで電報がドン／＼露西亞から来る。然るに日本からは何とも言つて来ない。故に私は米國人に問はれた時、

「何んとも言つて来ない」

と答へると、

「来ないと言つても此の通り佛蘭西からも獨逸からも露西亞からも電報が来て居るから嘘はない」

「嘘はないかも知れぬが實際私の所には通知が来ない、来ないから私は信用せぬ」

と云つて到頭信用せぬの一點張りて押し通した。所があとで日本に歸つて来て聞けば、あれが若し日本で發表せられたならば大騒動になる。故に日本ではビシヤ、と押へて一切新聞にも書かせず、又日本に居る外國人にも電報を出させなかつたと云ふことであつた。是は或は政略として宜かつたかも知れぬが、米國に居つた私に取つては随分苦しかつた。恰も其晩は前の大藏大臣フエヤーチャイルドと

云ふ人の晩餐會に招かれて居つた。五月十八日のことであります。其頃はまだ亞米利加には雪が残つて居つた。私の馬車は雪の塊に打突かつて輪を壊はして三十分程約束の時間に遅れた。三十分遅れて飛込むと、御客も主人も皆な玄關に飛出して来て何を言ふかと云ふと、

「初瀬が沈み吉野が沈んだ電報が来たから、貴下は定めし心配して居るだらう。

それが爲に三十分遅れたのも尤だ」

「私は何も知らぬ」

「知らぬと言つても新聞に出て居るではないか」

「新聞に出て居つても日本から私に公報が来ないから嘘だと思つて居る」

「嘘であつたか、まあ宜かつた」

と云ふやうなをかしい話があつた。それ程日本の軍艦が沈んだと聞けば、亞米利

加人が心配して呉れるやうになつた。

それから茲に少し御話して置きたいことは、大統領のルーズベルト氏は非常に日本の武士道を研究して居る。六月七日に私に午餐會に来て呉れと言ふから、紐育から華盛頓に往つて午餐會に臨んだ。其會食中ルーズベルト曰く、

「僕は日本の武士道と云ふことが頻に新聞紙上に現はれるから、色々本を見たが如何せん武士道と云ふことを書いた本がない。よく武士道とか武士とか云ふことを言ふが一體どう云ふことを武士道と云ふのか、何か書いた本はないか」と聞くから、

「それは書いた本がある。新渡戸稻造と云ふボルチモアの學校で勉強した日本人が、武士道に就て英文で書いた小さい本がある。それを讀めば、すっかり分かる」

「さうか、それが欲しい」

「それでは僕が後程送つて上げよう」

と言つて約束をしました。それから後で私が送つた所が、ルーズベルトがそれを讀んで、初めて日本の武士道と云ふことを知つて、直ちに紐育に電報を掛けて三十部取寄せて、それを五人の子供に一部宛やつて、

「之を讀め、日本の武士道の高尚なる思想は、吾々亞米利加人が學ぶべきことである。此の「武士道」の中に書いてある「天皇陛下」と云ふ字を修正すればそれで宜しい。亞米利加は共和國であるから天皇はない。俺は主権者であるけれども、大統領である。仍て「天皇陛下」と云ふ字を「亞米利加の國旗」と云ふ字に直せば、此の武士道は全部亞米利加人が修業し又實行しても差支ないから、お前達五人は此の武士道を以て處世の原則とせよ」

と言ひ聞かせたと云ふことを聞いた。それから残り二十五部は上下兩院の有力なる議員とか、又は親戚とか、或は内閣大臣の人達に之を分配して、此の「武士道」を讀めと云つた。此書で初めてルーズベルトが武士道を會得して、益々武士道と云ふことを研究する様になつて、遂には柔道まで官邸で稽古するに至つた。今の海軍大將の竹下勇と云ふ人は其の當時は公使館附の中佐であつたが、柔道の型を大統領に教へた指南役である。其後ルーズベルトは、到頭日本から疊を取寄せ又柔道の先生を呼んで、官邸の一室に疊を敷いて、其處で柔道著を着て稽古をした。そこまで言はば日本に感染れた、喜言へば日本にすっかり感化されたのである。

其の六月七日の食後に於ける大統領の談話は日本に取つては最も善い談話であつた。御承知の通り第一の會見でルーズベルトが非常に日本に同情を寄せたこと

は此前御話した。此の日大統領は私に向つて曰く、

「日本は今度の海陸の戦争に於て其の實力を初めて世界の各國から認められた。此の態度で戦争をして行けば、此の戦さは必ず日本が勝つ。然るに其の代りに又反對が起るかも知れぬ。是は君能く注意して貰ひたい。日本の實力を世界が認めるやうになれば、歐羅巴の強國が日本に對して猜疑の念を抱くであらう。現に獨逸の大使の如きは此間僕に會ひに来て言ふには、日本が日露戦役に付て成功すれば、亞細亞に於ける歐米諸國の勢力と地位に非常な妨害になる。日本が成功すればする程、歐米諸國の妨害になる。殊に獨逸の如きは青島の租借地に直ぐ影響する。米國の如きも比律賓は今に日本に取り上げられるぞ。それで成るべく日本をどうかして押へ付けなければいかぬ」と頻に僕に説いた。併し僕は之に對して、

「其の御心配に及ばぬ。假令日本が勝つた所が、又成功した所が、日本には武士道と云ふものがあるから、決して他國の既得權たる青島なり比律賓なりを取る」と云ふ心配はない。其事は御安心なさい」と僕が注意して置いた。併し日本人が成功したと言つて餘り圖に乗つて色々やると世界の反感を招いて、終には昔の十字軍(Crusade)の如きものを組織して、歐羅巴全體が日本を壓迫するやうなことをするかも知れぬ、此の點は注意して、勝つても餘り誇らぬやうに自重して貰ひたい。殊に旅順が陥落するまでは自重して貰ひたい。旅順が陥落すれば露國から必ず講和を申込むに違ひないから、それまでは日本が勝つても餘り誇つてはならない。若し誇れば歐羅巴の反感を買つて、講和談判の時に思はざる妨害が起る、講和談判の時になれば朝鮮は無論日本の勢力範圍に入るべきものと僕は思つて居る。とルーズベルトが言つた。是は實に意

外であつた。當時の情況に依れば露西亞を追拂つて、やつと朝鮮問題が解決する位に思つて居るのにルーズベルトは朝鮮は無論日本の勢力範圍に入るべきものと言つたのであるから私は意外に思つた。恐らく日本の政治家でも要路の人でも三十七年の六月七日に、さう云ふ考を持つて居つた人はあるまいと思ふ。後日になれば日韓合邦は俺がしたとか、俺の建策だとか、何とか言つて誇つて居る人もあつたが、ルーズベルトは其の時已に朝鮮は日本の物と斷定して居つた。實にルーズベルトは世界の大勢を達觀した人であると私は思つた。そこで又彼は語を繼いで言ふには、

「僕が今日嚴正中立を布告して、努めて日本に對して表面同情を示さぬのは、目下どうしても英佛の態度を押へ付けて、日本の妨害にならぬやうにしようと思ふから僕も亦自分の態度を成るべく注意して居る。併し君と僕とは古い友達で

ある。殊に同窓の友達であるから、君には腹臆なく言ふけれども是は公けに言ふのではなく、全く舊友として言ふのであるから、其の積りで聽いて呉れ。併し僕は大統領である事も承知して居つて呉れ」と言つた。さア、私は一向分らなくなつた。蓋しルーズベルトの眞意は舊友として言つたことは大統領としても矢張同論だと云ふ意味を婉曲なる言葉の中に含ませて云つたと云ふことを察した。果して其通り大統領は英佛の政府に對して日本の爲に骨を折つて呉れた。依て直ちに此の話を英文に認めて、暗號電報で小村外務大臣に發送した。此の電報の届いた時、日本政府は非常に大統領の態度を徳として小村から長い電報が私に來て日本政府は此の談話を非常に喜んで居る旨を大統領に通知して呉れると言つて來ましたから、小村の電報を大統領に渡しまし

た。

是から暑中休暇には亞米利加人は皆な山間か海岸に往つて、要路の人々は華盛頓・紐育・費府・ボストン等に居らぬから、一先づ日本に歸つて又秋になつて出直さうと思つた。所が米國の友達から山間の別荘、或は海岸の別荘に二三日又は一週間許泊りに來いと云ふ案内が來たから、好い機會である。此機を利用し避暑がてら各所に出掛けて日本の態度を説明しよう。此好機會を逃すまいと七八の二箇月は日本に歸らずして、亞米利加の友人の別荘廻りと決心した、所が茲に一つ大事件が起つた、其れは八月十一日に露國の驅逐艦デシテリヌイが芝罘に逃込んだ。それを日本の驅逐艦が同港に進入して捕獲して了つた。此の電報が亞米利加に來ると亞米利加人が騒ぎ始めた。今までは日本は假面を被つて居つたのだ。人道だとか、正義だとか、國際條規だとか言つて居つたが、今回局外中立港に遁込んだ露西亞の軍艦を捕獲したことは國際法違反だと言つて囂々と攻撃し始め

た。其機を見るや露西亞の大使は直ぐそれを利用して、合衆國の政府に向つて、それ御覽なさい。此の通り日本は亂暴をする。是でも日本が國際法を守る國かと言つて非常に突込んだ。語を換へて言へば、亞米利加から日本に抗議を申込みと云ふのである。時恰も悪かつたのは、豫てより日本に反感を持つて居る英吉利人の國際法の學者のローレンスと云ふ人が、丁度其頃出版せんとして居る國際法の再版の中に此の事件を直ぐ追加して、日本は信用するに足らぬ、國際法を此の通り踏破つたと云ふことを書いて非常に日本を攻撃した、國際公法學の泰斗たるローレンスが之を其の著述に書いたから堪まらぬ。普通の亞米利加人は日本をドンク攻撃し始めた。流石のルーズベルトも此の時だけは、

「ア、是は日本が悪し」

と知人に漏したと云ふことを聞きました。そこで私は直ぐ新聞記者を呼んで、是

は決して國際法違反ではない。米國も千八百十二年の英米戦争の時にゼネラル・アームストロングと云ふ英國の軍艦が、局外中立港に逃込んだのを撃沈した例がある。日本は亞米利加の先例を手本としてやつたのであるから決して國際法違反ではないと辯明して之を新聞に書かせた。時恰も小村外務大臣が強硬なる聲明書を發表し、露國は芝罘港を以て其の策源地として彼處の領事館に無線電信を据付けて常に旅順と通信を交換し又此のデシトリスイをして軍需品や必要品を、旅順に送らしめて居る。依て再三日本政府から露西亞に抗議を申込んだが恬として顧みない。故に已むを得ず日本は踏込んで捕獲したのであると云ふことを辯明した。是に於て其の攻撃は全く止まつた。蓋し戦争の時には色々の出來事が起りますから、黙つて居つては損である。黙つて居れば承諾したものの "Silence is consent" と見做される。故に何か事が起ればこちらでは言ふだけのことは言ふと云

ふのが最も必要である。

それから各地方の友人の別荘廻りをして名士と會して色々の話を聞きましが、それを一々申しますと長くなりますから止めますが、唯一つ茲に申し上げたいと思ふことがある、是は私の舊友たる大審院判事のホームズ氏の話であります。此の人のベバレー・ファームの別荘に一週間泊つた。一日椽側の寢椅子に寢轉んで話をする中にホームズが言ふのに、

「私は亞米利加人として日本人に會つた初めは明治四年であつた。其れ以來日本人には色々の人と交際して居る。又日本と云ふ新興國の狀況は自分も研究した。研究した結果、今度の戦さは日本が勝つと私は信じて居る」と斯う言つた。矢張ルーズベルトと同意見である。

「今度の戦争は日本が勝つと信ずる理由を君に言ひたい、それは今日の日本と云

ふのは——明治廿七年の事ですが——維新前の封建時代の武士道と云ふもので訓練した精神がまだ残つて居る。それに歐米の文明的の學術技藝を輸入して加味したから、精神は武士道で日本の古武士である。それに文明の利器を與へたから、是は實に強い人種である。一面には封建の武士であつて、一面には二十世紀の文明の利器を持つた人種である。斯う云ふ人種は世界にない。それ故に決して露西亞は之に敵對して勝つことは出来ないといふは信ずる。——それ迄は宜い——併し茲に君に忠告をすることがある。蓋し日本と雖も世界の趨勢に伴ふて段々進歩して往けば、封建時代の精神も段々薄らぐ云ふことは、日進月歩の今日に於ては已むを得ない結果である。それを能く考へて貰ひたい。現に希臘・羅馬は往昔歐洲に於て一番雄大なる國であつたが、一たび文明の域に達した後は柔弱に流れて遂に北方の野蠻人種の爲に征服されたではないか。中古に

於ては西班牙や葡萄牙が世界に雄飛して居つた。それが段々文明が進み、贅澤に流れ、金が殖えて來ると弱くなつて、西班牙や葡萄牙は第三位、第四位の國に下つて、英國とか佛國とか獨逸とか云ふ國が盛んになつた。又那破翁三世は一時は歐羅巴の覇權を握つて、英吉利も獨逸も露西亞も那破翁三世の前には跪いたが、最も奢侈に流れ贅澤に耽つた爲に、到頭捕虜となつて英吉利に囚徒となつたのではないか。近い例が斯う云ふものである。故に日本が封建の武士道の精神を長く維持して、それに歐米文明國の學術技藝を輸入消化して兩立して長く往き得るや否やと云ふことは將來の問題である。今日の日露戦争に就て觀察するに日本人は精神は封建的にして、使用する武器は二十世紀の文明的の物であるから露國に勝つ。若し此國情が何時迄も日本に存在して居る間は日本は世界獨歩の強國である。併し世の進歩と云ふものは思想に變化を及ぼし、又精

神も段々薄弱になる。それでは日本人が深く反省しなければならぬ。茲に吾輩は一言するが、生存競争場裏の世界的の國となつた以上は、野蠻と文明との二つの性質を同時に併有して居る必要がある。半面は野蠻人種であつて半面は文明人種である國が、一番強い。世界的競争の間に於て野蠻の性質が残つて居れば如何なる寒暑にも堪へ、如何なる困難にも打勝つことが出来る。而して一方文明の性質を備へて居れば、世界の文明を吸収調和して己の利益に使つて往くことが出来る。故に半面は野蠻、半面は文明と云ふのが世界の競争場裡に立つて往く上に於て、國民の深く注意すべきことである。今日の——（日露戦争の當時）——日本は、半面は昔の武士、半面は二十世紀の文明を有する國民であるから強い。之を長く維持して往けば世界中に日本に敵する國はないと思ふ。私は此の日露の戦争に於て坐るに日本の將來を祝福する」

と言つた。私は是を非常に適切なる忠告と思つて常に此の事を友達などにも話したのでありませぬ。それが今日では先刻も田中君が開會の初に言はれたやうに、思想が段々薄弱になつて、昔の氣風が薄らぎ、さうして歐米の薄ッペラなる皮相の文明を眞似て、唯服装とか、髪形とか、舉動とか云ふものは文明人種のやうになつたが腹の中、頭の中は文明ではない。それでは武士道の精神が残つて居るかと言ふと、それも残つて居らぬ。或は言ひ過ぎかは知りませぬけれども、實に今日の日本は餘程危い時に立つて居るやうにも思はれるので、此のホームズの言つた半面は封建の武士的精神を保持し、半面は二十世紀の文明たる學術技藝を修習すると云ふことは、日本國民が大に味ふべきことであると思つて居る。

それから九月一日に露西亞の巡洋艦が旅順から逃げて太平洋を横切つて桑港に突然入つて來た。即ち中立港に逃げ込んで來たのである。そこで亞米利加の官

憲が直ぐ臨檢して調べた所が、言を左右に托して一向真相を言はない。強硬に詰問すれば機械を少し損したから修繕に来たのだとか、或は暴風雨に遭つたから避けて来たのだとか、或は本國に一寸通信する用があつたから此處に入港したのだとか言ひ、中々真相を言はない。それで亞米利加では調査委員が乗込んで調べて見た所が、機械もどうもなつて居ない。結局旅順から逃げて来たに過ぎないと云ふことが分つた。そこで大統領が直ぐ命令を出して、二十四時間内に武装を解いて此戦争中桑港に碇泊するか、又は二十四時間以内に港を出て日本の海軍と戦ふか、二つの内一つを選べと云ふ嚴命を下した。それで露國の艦長は武装を解除して戦争の済むまでは桑港に碇泊して上陸もせぬ、戦争もしないと云ふ誓約をして其處に碇泊して居つた。所が露西亞の方では非常に反對してルーズベルトはどちらも露西亞の方に餘りに過酷だと云ふことを言つて頻りに攻撃した。それで私

は其の時偶々華盛頓に居りましたが、ルーズベルトが私に言ふに、

「あの桑港に逃込んだ露國の軍艦に對する僕の處置は至當のことではないか、露西亞の方では峻嚴に過ぎると言ふが、それは通用しない議論である。僕は中立國として露國に對して手強い處分をした。然るに英吉利と云ふ國は實に頼み少ない國である。英吉利は日本の同盟國でありながら英國の商人が軍艦に最も必要なるカーヂフ炭をイングリシユ・チャンネルの海上で露西亞の軍艦に賣つて金を儲けて居る。然るに英吉利の外務大臣はそれを知りながら黙過して居る。これが君の國の同盟國である乎。それ故に僕は此の間手紙を英國の外務大臣にやつて曰く、拙者は局外中立國の大統領として公平なる態度を以て日本と露西亞に對して處置をして居る。然るに英國は日本の同盟國でありながら、日本の敵たるロゼストヴェンスキーの艦隊に英吉利の商人が、艦隊に必要な英吉利

のカーヂフの石炭を賣り込むことを黙諾して居るとは何事ぞ。餘り酷いではな
 いか。それでも日本の同盟國か一本手紙で突込んだ所が、英吉利の外務大臣
 は一言もない。必ず止めさせますと言つて止めた。それであるから今度僕が露
 國の艦隊に對する處置は少し強いけれども、是は中立國の歐羅巴の諸國に良い
 手本を示す積りでやつた」
 と云ふ話でありました。是などは大統領として非常に日本に同情を寄せたことの
 一例である。

それからもう一つ序でに申しますが、露國の艦隊が阿弗利加の東海岸のマダカ
 スカや、安南のカムラン灣に來たときに、佛蘭西政府は其地方に持つて居る所の
 船渠に入れて軍艦の修繕をなさしめた。又上陸すれば其處の知事が大夜會を設け
 て艦隊の將校を款待したのみならず軍艦に必要な食糧品を給したり、色々な便

宜を與へた。そこでルーズベルトは又佛蘭西の外務大臣デルカッセルに手紙を遣
 つて曰く、

「日本の敵たる露西亞の艦隊を佛國政府の船渠に入れて修繕をなさしめ或は陸上
 に於ては艦隊を歓迎するやら食糧品其他の物品を給與すると云ふことは、日本
 に對して餘り片手落の仕業ではないか。」と言つて突込んだ。

是もデルカッセルが閉口して直ちに止めた。此等は日本の外務大臣が頼みもせず
 又私も一言も云はぬのに全く大統領が自發的にやつて呉れたのである。斯の如き
 大統領が亞米利加に居て日本に直接間接便宜を與へて呉れたことは洵に日本の爲
 には幸福であつたと思ふ。

斯くして我軍が連戦連勝の喜を重ねて居る間に實に憂ふべき宣傳が歐羅巴から
 亞米利加に來た。それは陸軍に於ては日本が勝つから、露西亞は段々豫定の退却

として、ズン／＼ハ爾賓に向つて退却する。又軍艦は旅順と浦鹽を日本が封鎖して居るから出切らない。故に戦さに於ては陸海とも露西亞が負ける。併し財政の點では日本が必ず負ける。露西亞はあの通り世界無比の大國であつて、人口も多し。そして金は佛蘭西・獨逸と云ふ後楯があつて援助するから心強い。之に反して日本は人口も少ない。國も小さい。金を借りようとしても亞米利加が貸す位のもので、歐羅巴では露西亞程には貸さぬ。又公債に對し抵當を入れる點に於ても露西亞は金坑其の他の礦物が大變あるけれども日本にはさう云ふものが無いから、財政で日本は倒れる。今年一杯か來年中には日本が財政上疲弊して終に降参するであらう。故に露西亞は豫定の通り引退り引退りして日本の疲れるのを待つて居るのであると云ふ論が大分歐羅巴から亞米利加に傳つて來た。是には亞米利加人も餘程動かされた。若しさう云ふことになれば曩きに日本の公債に應じた連

中も利息の支拂かどうなるか分らぬと思つて自分の懐工合から心配し始めた。そこで Review of Reviews と云ふ有名な雑誌がある。其の記者にモンローと云ふ私の知人がある。是が私を來訪して、

「日本の財政に就て危惧の念を持つて居る人が大分ある、貴下は何か之に對する辯明を書いて呉れないか」と言ふ。

「宜しい、書かう」

それから私の手許にある日本の財政の有様、經濟の有様、私立の銀行諸會社の株券の拂込等、總ての經濟を基にして斯う云ふ有様であるから、決して一年や二年では日本の財政は弱りはせぬと云ふことを、數字と統計に依つて事實を論文に書いた所がモンローが喜んで、それが十月號の雑誌に載りました。是は大變亞米利

加人の危惧の念を消散させるに與つて力があつた。此の如きことは戦争中始終誰か外國に滞在して、何か日本に不利な事件があれば直ぐそれを説明するだけのことをして居らぬと、非常な損害になる。東京の真中に居つて俺は國士だ、日本の陸海軍は偉い、強いと唯國內で威張つて居つても、波打際以外の外國には其聲は達しない。是が日本人の缺點である。併し外國に往つて嘘八百言つてはいかぬが、事實は事實として發表することが尤も必要である、是から先き日本が世界列強の間に立つには此事は必要な事である。政府は勿論國民も其の覺悟で居なければならぬと云ふことを私は坐るに感じた。

茲に其の十月には日本は又非常なる打撃を受けた。それは十月九日に皆さん御承知の沙河の戦があつた。此戦争は日本から來た電報では合引きのやうに云つて居るけれども露西亞から來た電報では非常な日本の負け戦さて、露西亞は大勝利

となつて居る。それは單り露西亞から來るのならば亞米利加人も露西亞は始終嘘八百、誇大に言ふから信用を措かぬが、巴里から來るのも、伯林から來るのも、倫敦から來るのも、何れも皆な沙河の戦は露西亞の大勝利、日本の大敗北である。日本から來るのは今度は苦戦であつたが併し合引きだと言ふ。故に私も今度は日本が負けたのかと思つた。所が大統領が急に私に會ひたいから來いと言ふから往つた。さうすると大統領が、

「之を見せるから見る、是は露西亞の方に往つて居る觀戰武官からの報告だが、之を見ると露西亞は日本の大砲十一門捕獲したとある。それから日本の兵隊は殆ど全滅のやうだ。憐れな戦死を遂げたらしい。是は米國の方から露西亞に附いて居る觀戰武官から言つて來たのだから本當と思ふが……」

「僕は苦戦したと云ふ電報は受取つたが、大砲を十一門取られたと云ふ報告は來なす」

大統領曰く、

「君の所には報告は來ないか。併し僕の方から派遣した露西亞軍に附いて居る觀戰武官から言つて來たことだから本當と思ふ。一體どう云う譯で負けたのだらう。鴨綠江を渡つて以來日本は一度も負けなかつたが、今度はどうした譯で負けたのであらう」

「僕は軍人でないからどう云う譯で負けたか知らぬ」

「併し是は確に今度は露西亞が勝つたやうだ。そこで僕が一つ茲に忠告したいことがあるがどうだらう。鴨綠江から以來、得利寺・遼陽其他の戦に於て皆露西亞が負けて、一度も勝たない。今度初めて露西亞が勝戦さをして有頂天になつ

て喜んで居るから、此處で一つ露西亞の顔を立て、やつて露國も開戦以來初めての勝戦さをしたではないか。此處で日本と講和を結び戦さを止めてはどうか、と言つて講和の勸告をしようと思ふが、日本政府の意旨はどうだらうか。勸告する前に先づ君の意見を聽きたら」

「私は 我政府では同意しまいと思ふ」

「どう云ふ譯で……」

「如何にも日本は随分困つて居る。困つては居るが、今度の沙河の戦さは假に負けて居つたとしても、唯一度の負け戦さ位で、直に君に調停を願はうとは思はないだらう。僕は君が忠告しても日本政府は決して同意せぬだらうと思ふ」

「同意せぬだらうか。君はさう思ふか」

「マア僕は駄目と思ふから、旅順の陥落まで待たうぢやないか」

「それぢや仕方がない。旅順の陥落するまで待たう」

それで此の時既にルーズベルトが露西亞に向つて、講和を勸告しようと思つたが、私は日本政府にも通知せずして獨断でいかぬとはねつけた。それを後に新聞記者などには、沙河の戦で日本が負戦をした時に日本政府がルーズベルトに頼んで、どうか露西亞の方に講和の勸告をして呉れと云ふことを要求したのだと書いた者があるが、是は嘘である。後にハーバート大學の總長のエリオット氏が私に手紙を寄越して、沙河の戦の後に日本政府がルーズベルトに講和の調停を頼んだと云ふことが頻りに亞米利加に宣傳され、又其の通り書いた者もあるが、果して是が本當か嘘かお前に聴きたいと問合せて來ました。それで私は十月九日の大統領の會見のことを詳しく英譯して、此通りであるから政府が頼む譯はない。僕が華盛頓に居つて反對した。寧ろ今度ルーズベルトが露西亞の顔を立て、此處で講

和談判を初めたらどうかと言つたけれども、私は日本政府が同意する筈がないと言つて留めた位である。況んや日本政府から頼む譯はないと言つて辯解した。當時は斯う云ふ風に誤解されて居つた。當時私は何故負けたか、又日本政府の方から何の報告も來ぬから日本軍が果して負けたか、どうか知らなかつた。然るに其後歸朝して聞いた所が果して負けたと云ふことであつた。そこで黒木大將に會つたとき、私が、

「貴方は先般亞米利加を訪問せられましたが、大統領ルーズベルトは豫て沙河の戦の真相を聴きたいと言つて居つたが、貴方に聴きはしませぬでしたか」と尋ねた所が、黒木大將は、

「聴かれました。沙河の戦でどう云ふ譯で大砲十一門を取られ殆ど一箇大隊全滅のやうな悲惨な目に逢つたかと聴かれましたから、私は嘘も言へないし、もう

戦さも濟んだことでありますから、すつかり白状しました。それは軍令の行違ひで或る部隊が少し先方へ出過ぎたから、露西亞が機を見て先に出た軍の連絡を断ち切つたので全滅した。是は實際であるから有りの儘言ひました」と黒木大將の話でありました。兎に角沙河の戦で露西亞は非常に喜んだ。それでルーズベルトがそれを機會に講和談判を勸告しようと思つたが、是は日本政府までは達せず私獨断で止めてしまつた。——それからまだ色々の事件が御座いますけれども大體は略しまして、もう一つ簡単に申上げたい事があります。十一月三日は天長節である。私は此の天長節を機會に一つ、亞米利加の朝野の人に感謝の意を表しませう。——同情をして呉れたことに對して感謝の意を表しませうと思つて、ボストンのサンマセット・ホテルで大夜會を催した。二千人以上に案内状を出した。十一月の初は亞米利加の交際季節の始めでありますから、

日本の天皇陛下の天長節をボストン第一のホテルでやると云ふことと、それが交際季節の第一番の宴會に當ると云ふので非常に歓迎されました。戦勝國の天皇陛下の天長節には是非往かなければならぬと云ふので、我も我もと競争して私に色々の傳手を求めて招待状を貰ひに來た。そこで私は我が天皇陛下の天長節を祝ふのであるから、假令知らない人でも友人の紹介があればやつても宜しいと秘書に言ひ付けた。それで到頭二千の豫定が二千五百に達する程招待状を出しました。亞米利加人は日本の天皇陛下の天長節の祝宴會に列するのを榮譽として非常に期待されました。米國は幸にさう云ふ氣運になつて來たけれども歐羅巴方面ではまだ日本に反對の態度を採つて居つた。歐洲では曩きに日本の財政について攻撃したけれども是は成功しなかつた。そこで今度は黃禍論“Yellow W. peril”と云ふことで日本を攻撃

し始めた。是は先年獨逸の皇帝が發明した言葉である。日露戦争で日本人が勝てば黄色人種が世界の文明國に Peril (禍害) を及ぼす。故に日本に勝たせてはいけない。何處迄も白色人種は黄色人種なる日本人を叩き潰さなければならぬ。是は確かに世界の文明の禍だと云ふことをやかましく言つて來た。是時に當り、North American Review と云ふ有名な雑誌の主筆にコーネル・ハーベと云ふ人がある。(後ち駐英の米國大使となつた) 此人が私にどうか之に就いて反對論を書いて呉れと言ふので、私は筆を執つて “The Yellow peril is the golden opportunity for Japan” “黄禍論は日本の爲には黄金の時期なり” と言ふ論文を畢生の智慧を揮つて書いた。其れは黄色人種は決して世界の禍にはならない。黄色人種が亞細亞に於て勢力を得れば寧ろ世界の平和を維持する基であると云ふ論であつた。其要點は明治四年岩倉右大臣が歐米に往つて、條約を改正したいからと言つた時には各

國から苛められたのである。然るに日本が日清戦争に勝つた所が自哲人種の諸國が、今度は條約改正は御尤ですから對等條約に致しませうと云ふことを向うから言つて來た。對等條約につき從來最も反對した英國が第一番に對等條約を締結致しませうと言ひ出して Extra Territoriality (治外法權) を廢棄した。夫れから亞米利加・佛蘭西・獨逸等を始め我もくと對等條約を結びて治外法權を撤去して初めて對等條約を結ぶに至つた。是は日清戦争に勝つた賜である。抑々兵力がなくて外交は出來ない。兵力無しで空ち世辭の外交のみで遣らうとしても先方は鼻の先であしらす丈で決して取合はぬ。然るに日清戦争に勝てば直ちに治外法權撤去御尤と條約改正を向ふから言出すやうになる。私は外交談判と云ふものは國力を如實に示す兵力が伴はなければ、假令如何なる英雄が控へて居て、如何なる雄辯家が辯舌を振つても、如何なる交際術の上手な人があつて國交を圖つても駄目

である。日本が今日のやうな世界的地位に立つ事が出来たのは、日清戦争と日露戦争の賜である。私は其事を明白に露骨に書いた。是は日本の真相を亞米利加人に紹介させる上に大分効能があつたと思ふ。——かうして東奔西走する間に三十七年は暮れました。

それから翌三十八年の一月一日は御承知の通り旅順が陥落した。それより前に一寸申上げたいことがある。三十七年の十一月と云ふのは丁度大統領の改選期でルーズベルトが再び大統領になるや否やと云ふ岐れ目である。其前の十月頃からルーズベルトはピシヤツと意見を發表することを止めた。それまでは随分怯めず隠せず日本に同情を寄せる意見を發表して居つたが、十月になると全然止めて了つた。それで十一月の大統領の選挙までは黙つて居る。そこで私はルーズベルトに會つて、どう云ふ考か聽いて見ようと思つて大統領を訪ねた。

「君は此頃大分黙つて居るがどうしたわけか」

「さうだ、今度僕が選ばれるか選ばれないか分らぬ。餘りに日本に同情することを言ふと、反對黨がそれを口實にして日露戦争に厳正中立を布告した大統領が日本に同情を寄せたと云ふことを楯に取つて僕を落選させやうとするから、僕は大統領に選挙せられる迄では沈黙を守らうと思ふ」

「それは御尤だ」

と斯う言つて私は何とも要求しなかつた。さうすると愈々ルーズベルトが大統領に大多數で選ばれた。是は華盛頓以來の大多數で選ばれた。此時ルーズベルトは此の大多數で選ばれるならば、俺が日本に對して如何なることをしても國民が承知すると思つたらしい。そこで私に手紙を寄越して、食事をしたいから來て呉れとのこと。で約束の十二月十九日に往きました。さうするとイキナリ言ふことが

面白。

「今回僕の當選は將來君の爲に一つの援助となるべし。是れ僕が最も樂む所なり」

今度當選したから將來君の爲に加勢することが出来るので喜ばしい。自分が大統領になれば日本の爲に何處までも盡くして平和に漕付けたいと思ふ。旅順はどうも今年中には落ちまいと思ふが、來春になつたら必ず落ちるだらう。其の時は僕が日本の爲に働く時機であると云ひました。大統領は旅順陥落を以て講和の時機と思つて居た。又亞米利加人もさう思つて居つた。果して三十八年の一月一日に旅順が陥落した。其時ルーズベルトが私に會ひたいと言つて來た。早速往つて會つた所が非常に喜んで曰く、

「旅順の砲臺と云ふものは今日世界のありと有ゆる學術機械を應用した堅牢無比

の砲臺である。迎も歐羅巴や亞米利加の軍隊では之を陥れると云ふことは思ひも寄らぬ。併し此の難攻不落の旅順を陥れるのは單り日本の兵隊あるのみ。日本の陸軍の人は之を以て非常な名譽とするであらうと思ふ。歐米のありと有ゆる技術機械を應用した難攻不落の砲臺にして迎も歐米の兵隊が落ち切らぬものを落すのは日本の兵隊のみ」

と言つた。是れ程まで大統領は旅順の陥落を喜んだ。然るにルーズベルトは尙又言葉を改めて曰く

「併し茲に僕は一つ君に忠告して置く。どうか其事を日本政府に通告して呉れ給へ。旅順が陥落したと言つて圖に乗つてドン／＼北に往つて、哈爾濱まで取らうと云ふやうな軍略は止めて貰ひたい。畢竟それは損だ。假に哈爾濱まで日本の兵が往つたとして、それで露西亞が降参するかと言ふと決してさうではな

い。まだ六千哩も聖彼得堡迄あるのみならず、哈爾濱に往けば戦線が何百哩に擴がる。それを守備する兵隊が日本にあるかどうか。又それに補給すべき兵器彈藥があるかどうか。故に旅順が落ちたと言つて哈爾濱迄往かうと思ふのは考物だ。何處か好い潮合を見て戦争を止むべきものと思ふ、それには今回の旅順の陥落は絶好時機である。多分是で露西亞の方でも講和談判を要求するやうな氣になりはせぬかと思ふ」

斯う云ふやうな話を致しました。私は直に暗號電報で、小村外務大臣に報告した。さうして段々見て居ると旅順は落ちたけれども、露西亞は少しも平和を希望するやうな態度が見えぬ。莫斯科からはドン／＼新しい良い兵隊が哈爾濱に向つて輸送する。或は五十萬と號し、或は六十萬、と號してゐるが少くとも四十五萬は往つたやうである。もう露國も疲れて居るだらうと思ふのに中々新しい兵隊が

續々やつて来る。それは何故であるか日本でも分らぬ。亞米利加でも段々研究したがどうも分らなかつた。所が戦争の終りがけになつて初めて分つた。若し私が之を初めに知つて居つたら無論日本政府に電報を打つたらうけれども、判断がつかないから致方がない、然るに平和克復後歸朝して兒玉大將に會つて、

「君は滿洲軍の參謀總長をして居つたから疑を懐かれたでせうが、どうして露國があれだけの大軍を莫斯科からドン／＼極東に送つたかお分りでしたか」と尋ねると、大將は、

「僕もあの事は不思議に思つて居つた。あの輸送は誰がやつたか知らぬ」と言つたから私は兒玉に告げて曰く、

「實は米國に於て僕は大統領を始め各種の人々に聞いた所が、單線で六千哩莫斯科から哈爾濱迄澤山の兵を送るのは不可能だ。であるから一年續けば鐵道は壞

れるから、新兵を補充することは出来ぬ。又兵器彈藥を補充することも出来ぬと思ふと言つて居つた。所が鐵道は壞はれぬのみならず、益々軍隊、兵器、彈藥が往くので、それを僕も色々調査したり、又色々の人に聞いたりした。所が茲に驚くべきことが分つた。それは彼の西伯利鐵道は鐵道大臣のヒルコフ公爵が經營して居つた。公爵は日露戦争の數年前家産が傾いて、到底公爵の暮しが出来ぬと云ふので、亞米利加に來て鐵道の工夫になつて、亞米利加の鐵道工夫に混つて一勞働者として頻に勞働に従事した。所が元が偉い家柄の人であり、性質も善い人であるから、上役の人に當ならぬ者であると認められて、漸く工夫から工夫長、工夫長から事務員、事務員から課長と云ふやうに段々拔擢せられて終には重要な位置を與へられた。それから華盛頓・紐育其他亞米利加の重要な鐵道を視て廻つて經營方法を調べたり、又技師にも交際を結んで

露國に歸つて行つた。其時恰もウイッテが大藏大臣として西伯利の鐵道を旅順大連まで延長しようと云ふ際であつたから、ヒルコフ公爵を直に鐵道大臣に任して「貴下に一任する」と云ふことにした。それで到頭鐵道が大連・旅順まで來た。其の中に戦さが始まつた。そこでヒルコフは極く秘密に亞米利加の元の友人と交渉して鐵道の技師を何十人、又技術家を何百人と露國に呼寄せ、さうして亞米利加の製鐵所、汽車製造所からドン／＼汽車やレールを買込んで亞米利加から輸入した、さうしてそれを莫斯科から單線で一つの列車を二三十臺繋いで、それに兵隊も載せ、兵器彈藥も被服も載せてハル濱まで送つた。ハル濱では之をサイド・トラック（横線）に牽入れて、其の貨車は或は倉庫とか、或は兵營にしてしまふ。さうして莫斯科からはドン／＼日に何十回も來る。單線で一度來た車輛が再び莫斯科に戻るとすれば仲々撈取らないが何しろサイド・ツ

ラックに入れて倉庫にしたり又は兵營にして出發地に戻さぬから一日に何十回となくドンク来る。さうして鐵道のレールが悪くなれば、ドンク鐵道の技師が亞米利加から新に輸入したレールで修繕する。そこで六十萬の大軍が輸送された次第である。所が是は誰も知らなかつたが、戦さが濟んで後になつて漸く分つた。僕も濟んだ後に此の事を聞いた、若し僕が早く之を聞いて居つたら君に知らしたものを、残念の事をしたと思つたが後の祭であつた」

と云ふ話を兒玉にした。さう云ふ方法で西伯利の單線鐵道があの大兵を難なく送る事が出来た。鐵道だけはヒルコフ公爵の爲に露西亞が非常な名譽を得、又成功もした。あとは皆不成功に終つた。是が鐵道の話であります。

偕乃木將軍がステツセルに送つた降伏の勸告狀に付一言しよう。旅順の陥落前に此勸告狀は米國に傳つて居つた。さうすると是が旅順の陥落と共に非常な評

判になつた。乃木將軍の降伏勸告狀と云ふものは亞米利加人が感服して大評判となつた。それは、

「我が天皇陛下は徒に無辜の兵を殺し、無益の血を流すを以て非人道と思召さる。此際投降せば武人の名譽を保つて帶劍の儘旅順を出で、北方の露軍に投軍することを聽許あるべし」

と云ふのでありますが、是は非常に亞米利加人が感服した。是が即ち武士道だと言つて賞讃した。所が之に對してステツセルがどう言つて斷つて來たかと云ふと、

「吾輩は決して降伏はせぬ」

加之 露國皇帝に上奏して、

「臣は日本皇帝の降伏勸告を拒絶したのみならず。臣は茲に祖國に對し最後の訣

別を爲す。臣は旅順を以て墳墓の地と爲せんと決心す」と言つた。此電報は旅順から露國皇帝に打つた。是非非常に亞米利加で評判になつた。流石はステツセルである、實に偉い。さうして一方も流石は乃木だ、實に偉い。乃木は天皇陛下の命を承けて貴下が降伏すれば軍人の待遇を以て帶劍の儘奉天に送る。さうして又再び戦へといふ。是も感心だ。又ステツセルが露國皇帝に對して Last farewell (最後の訣別) を爲して、臣は旅順を以て墳墓の地と爲すと言つた。是も感心だと云ふて兩將の言行を對照して新聞に出して賞揚して居りました。一月一日の降参のときにはどうです。ステツセル其他の士官は立派な軍服を着て、乃木と手を握つて居つた。之に反して兵隊は破れ軍服を着、破れ靴を穿いて、ゾロ／＼出て來た、實に憐れな有様である。先づ普通ならステツセル將軍は破れ着物を着、破れ靴を穿いて居る可きである。然るに兵隊は見るに忍

びないやうな見すばらしい服装をして居るに拘らず、自分達は立派な軍服に立派な靴を穿いて居る。此の事は亞米利加人に非常な悪感情を與へた。のみならず、ステツセルが長崎に上陸して日本のお土産物を買つた。お土産物や美術品を夫婦で五千弗も買ひ込んで、船に積んで歸つたと云ふ電報が新聞紙に載せられた。依て米國人は云ふ。實に露西亞人は嘘八百言ふ。墳墓の地と爲すどころではない、五千弗でお土産を買つて歸つた。斯の如き心掛であるから負けるに決つて居ると言つて大に露西亞を悪く言つた。是などは旅順開城の時の露西亞の將校と日本の將校とを比較對照して、露國は最初は偉いことを言ふが、しまいの方が卑劣だ。斯う云ふ次第で實は旅順陥落の有様に依り、日本軍は亞米利加人に非常に好感情を與へた。そこで私も洵に嬉しかつたので、宮内大臣の田中光顯さんに宛て「旅順再び我が有ニ歸ス、欣喜雀躍ニ堪ヘズ、冀クバ微臣ノ祝辭ヲ兩陛下ニ上

奏アランコトヲ請フ

斯う云ふ電報を打ちました。

儲旅順が陥落したから、大統領ルーズベルトは平和克復の事を露國政府に勸告
しました。露國は中々承知しません。其言ふ所に依れば沙河の戦で露國の軍隊の
士氣は非常に奮起して居るから旅順は陥落したけれども奉天には四十萬の新兵が
本國から来て屯してゐる。是は武器も良い。又兵隊も今迄のやうなものではな
い。是迄で負け戦をしたのは西伯利の駐屯軍であつたからである。今度のは本
國の精兵であるから之をクロバトキンが率ゐて奉天から南下して來れば、大山の
率ゐる滿洲軍を攻滅ぼす位の事は今年の春の間に出でない。それであるから講和
談判などは思ひも寄らぬと答へた。それで旅順は落ちたけれどもルーズベルト
も私も、いつ講和談判が始まるか分らぬと云ふ譯で、暫く形勢を觀望するの外は

ないと云ふことになつた。

然るに華盛頓の外交社會ではルーズベルトが講話談判の斡旋をして居ると云ふ
ことがチラ／＼聞え始める。さうすると二月七日、高平公使が私に電報を打つて
急に會ひたいから華盛頓に來て呉れと言つて來た。それで私は直ぐ往つて停車場
に着くと高平公使は馬車で迎へに來て居つたから同乗して旅館に往きました。其
の途すがら高平公使が言ふには、獨逸皇帝から重要なる親翰がルーズベルトに來
たと聞く、是はどうも講和談判のことらしいと云ふ外交社會の取沙汰である。そ
れで長さは此の位、幅は此の位、其の裏には封蠟が附いて獨逸皇帝の印が押して
あると云ふ。是は大統領が誰にも見せぬが最も重要なる機密の親翰であると云ふ
ことを私は確なる人から聞いた。是は講和談判のことであらうと思はれた。それ
でルーズベルトに會つて閣下は獨逸の皇帝から御親翰を御貫ひになりましたかと

聞いた所が、さう云ふものは貫はぬと白を切る。依て其事を自分に密かに告げた友人の所に往つて、今ルーズベルトに聴いて見たが其様なものは貫はぬと言ひますかと話した所が、いや確に來て居ると言ふ。併し私はルーズベルトがそれを貫はぬと言ひ張るのに、もう一度往つて、貫つたかとも聴けぬから、どうか貴方ルーズベルトに會つて聴いて呉れぬかと言ふ話。それで私は、

「よし、それぢや往つて聴いてやらう」
と言つた。もうそれは日の暮方でした。それから大統領に電話を掛けて、急に會ふ用事が起つて紐育から態々來たが、いつ會へるか尋ねると、

「今夜は外交團を招んで晚餐會を開くから、十時過ぎて宜しければ差支ない」と云ふ返事であつた。それから時刻を計つて大統領の官邸に往くと、ルーズベルトが玄關まで迎へに來て、

「何の用だ」

と聞くから、

「此處では話が出来ない」

と言つて、いつも秘密談判をする二階の書齋に往つた。さうするとルーズベルトは向ふの方からソファアをゴロ／＼引いて來て、

「今夜外交團のお世辭話で疲れ切つたからソファアに引くり返つて話さう。君は其の安樂椅子を持つて來て、それに腰を掛けて話し給へ……何か飲むか」

「僕は酒は飲まぬ」

「それぢや炭酸水でも飲まう。一體十時過ぎて來たのは何事か」

「少し用があるのだ」

「どう云ふ用か」

「僕は一寸君に聴きたいが、獨逸皇帝から秘密の親書を貰つたかと單刀直入問ひ掛けた。所がルーズベルトは平氣な顔をして、

「イヤ何も貰はぬ」

高平に言つた通り矢張り貰はぬと言ふ。そこで私は、

「高平が聞いたときにも貰はぬと言つたそうだが、僕にも君が貰はぬと言ふならば僕は重ねて問ひはせぬが、君は僕の友人でないか、友人なら本當の事を言ふて良いぢやないか。君は貰はぬと言ふけれども確に貰つて居る。貰つたと云ふ事實のみならず其の中に書いてあることもチャント僕は知つて居る。それでも君は貰はぬと言ふか」

「どんな事が書いてあるか」

斯う言つたから是は貰つたに違ひはないと思つて、

「それは獨逸皇帝が日露間の講話談判を君と二人で斡旋する代りに、膠州灣は獨逸の勢力範圍にすると云ふ其の交渉の手紙と見て居る」

「そんな事はない」

「そんな事はないなら、どんな事があるか」

此處で一本參つた。

「そんな事がないと言ふなら親書は來て居るのだらう」

「來て居る」

「それ見ろ。來て居るぢやないか」

「併し君の言ふやうな事は書いてない。大變日本に好いことが書いてある」

「それは僕は信用せぬ。獨逸皇帝は是迄日本に邪魔をした人だから、今度に限つて日本に善い事をする筈がない。自分の爲めを圖つて自分の利益になることを

する人だから」

「それでも書いてある」

「書いてあると言つても僕は信用せぬ。君は僕の友達だから嘘は吐かないと思ふけれども、君が僕に手紙を見せぬ以上は信用出来ぬ。其の手紙を見せなさい」

「それは見せられぬ。是は外務大臣のジョン・ヘイにも見せないのだ。高平公使が来て「手紙を受取つたか」と聞いたときにも貰はぬと云つた位である。併し獨逸皇帝の機密の手紙だから誰にも發表せぬけれども、君は親友だから話し丈けする。手紙を見せるだけは許して呉れ」

「僕は手紙を見なければ君の言ふことを信用せぬ。能く考へて見なさい。獨逸皇帝の態度は、日本に於て伊藤・井上・山縣・松方の元老も心配して居る。獨逸皇帝に付ては既に三國干渉の時にも手古摺つた苦い経験がある。それで日本政

府は獨逸皇帝の態度が一番怖い。獨逸皇帝がどう云ふ考かと云ふことが、日本政府の一番心配して居る所である。君が僕に今度は日本に善い事が書いてあると言ふなら一寸で良いから其の手紙を見せて呉れ。さうすればどれ程日本政府は君を徳とするか分らない。斯うまで君の友情に甘えて要求するのは無理かも知らぬが、僕の國は國を賭して戦つて居るのだからどうか許して呉れ」

と言ふと、ルーズベルトはスツト起ち上つて、金庫の所に行きポケットから鍵を出して自分で開けて一通の書翰を持ち來りて私に見せました。果して高平公使の言つたやうな大きさの手紙で、封蠟が裏に押してあつた。

「是れ見給へ」

と云ひましたから開いて見ると佛蘭西語で書いてある。私も佛蘭西語はどうにか斯うにか拾ひ讀みはするけれども覺束ないので、

「一寸君一つ翻譯して呉れ」

と言つて、二人でズット見て翻譯して貰つた。其翻譯した所に依れば、

「予は支那に寸地をも希望せず、又三東省をも占領せざるべし。平和克復のこと

は一に貴下の意見に任かす」

と云ふ様な意味が書いてあつた。

「是だから君良いぢやないか」

とルーズベルトが言つた。

「之を見せて呉れたのは實に有難い。友達として斯く迄親切に又斯く迄僕を信用

して呉れた事は一生忘れない。獨り僕のみならず日本國民も君の今夜の親切は

忘れない。實に君は日本の恩人だ、倍一を得ては又他の一つを望むようなれど

も僕は此事を日本政府に電信を打つて知らせたい許して呉れないか」

「それはいかぬ。君が懇望であつたから君丈けには見せたが、僕の外務大臣へイ

にも見せないものを日本政府に漏らす譯に往かぬ。又萬一日本政府から漏れた

ときは獨逸皇帝に申譯がなす」

「併し今迄僕の電報は一つとして漏れたことはなす」

「屹度大丈夫か」

「大丈夫だ、其事は僕が保證する」

「そんなら宜しい」

と言つたから私は堅くルーズベルトの手を握つて二階から下りた。それから玄關

に出て來ると夜の十二時近くですが、十四五人の新聞記者が待つて居つて、

「今まで講和談判の條件に就てお話があつたのですか」

と尋ねますから、

「イヤ私はルーズベルトとは舊友であるから、餘り夜話をし過ぎて遅くなつたのみ」

と答へて這々の體で旅館に遁げて來ました。さうすると高平がまだ待つて居つた。「君が話した獨逸からの手紙は果して來て居つた。僕は今から會見の模様を英文で書くから君は公使館に歸つて暗號電報の用意をし給へ」

と言つて大體の様子を話をして、それから英文に書いて、それを秘書に持たしてやつて、暗號電報に翻譯して小村外務大臣に打つた。夜は正に明け方であつた。日置益と云ふ一等書記官が翌日やつて來て、

「昨夜の貴方と大統領との御話は國の爲に非常に貴いものです。貴方の今度亞米利加に御出でになつて永い間御滞在なされたのも、あの電信一つだけで十分でございます。金鵝勳章の價值は慥にあります。其の代りに我々公使館員は昨夜

は暗號電報の翻譯で徹夜し朝迄掛つて遂に一睡も出來ませんでした」

と言つた位でありましたが、日本にある元勳も政府當局も此の電報を見たときには非常に喜んだと云ふことを後から聞きました。

偕旅順が陥落すれば無論露西亞は講和の依頼を大統領にするだらうとは歐羅巴でも思ひ、又亞米利加でも思つて居つた。所が中々講和をする模様がなない。そこでルーズベルトは嘗て私にも申しました通り、旅順の陥落まで待たなければ迎も之は解決せぬからと言ふて居つた言質もありますので、自ら露西亞に交渉して試みましたがけれども前にある通り拒絶せられたから、今度は佛蘭西の外務大臣デルカッセに頼んで、もう旅順も陥落したから、茲で講和談判をしてはどうかと云ふことを露國に申込んだ。さうするとデルカッセの返事に、露國政府は仲々講和談判などをしようと思ふ考はない。其譯はクロバトキンが四十萬の兵を奉天に集中

して居り、尙ほロゼストウエンスキーも今や亞細亞の海岸に行きつゝある。それ故に此のロゼストウエンスキーが日本海に近付くや否やクロバトキンは奉天から四十萬の兵を以て大山軍に當る。さうして一戦の下に大山の全軍を撲滅してしまつて、一兵一卒でも大陸には残さぬ。さうしてロゼストウエンスキーが對馬海峡に突進して東郷艦隊を全滅し、日本と朝鮮との聯絡を斷つ決心であるから、講和談判などは思ひも寄らぬと云ふ劍もホロ、の挨拶であつた。そこでルーズベルトも困つて私を電報で呼びましたから、華盛頓に往つた所が、實は是れ／＼のことである、是は奉天の戦で、向ふは終局の決戦をする積りであるから、暫く奉天の戦までは待つて居るより外はないと、斯う言ふて居りました。

それから段々日露の兩軍が戦闘準備をして、三月十日のあの激戦があつた。其の戦で到頭日本が奉天を占頭して、露軍が哈爾濱に退却した。そこでルーズベ

ルトは電報を以て、私に華盛頓に来るやうにと言ひましたから參りました所が、大統領は自分の部屋から飛出して来て、私の右の手を取つて、「Greatest victory!」「偉大なる勝利」と非常な喜びで握手を強く致しました。是で今度はもう戦さは豫て言つた通り、奉天の戦で終局した。今度の大激戦で斯く偉大なる勝利を得た以上は、今度は露西亞が必ず講和談判をするであらうから、先づ是で日本の爲に僕が盡力し甲斐があつたと私に言ひました。ルーズベルトは非常に奉天の戦勝を喜んで居りました。

然るに時日は過ぎましたけれども、露國政府から講和の斡旋を大統領に頼む模様もなく又ロゼストウエンスキーの艦隊も日本海に来らず。それで一向講和談判の兆候も見えず、そうするとルーズベルトから三月二十日に私に一寸會ひたいから午餐に来て呉れと云ふ手紙が來た。私は華盛頓の大統領の官邸に往き、午餐の

後相共に別室に行くと其處に陸軍大臣のタフトも居つた。ルーズベルトが言ふには、

「實は吾輩は六週間の休暇を取つて、今からコロラド州の山の中に熊狩に往く。今のところ別に講和談判が始まる様子も見えないから、六週間熊狩に往く。其の留守中は陸軍大臣のタフトに大統領の権限を委任してあるから、僕の留守中に用事があつたら總てタフトと相談して呉れ給へ。僕は熊狩に往く時には一切外部とは電信・手紙の往復はせぬ。山の中に入つて一切人間社會と交渉せぬ。但し僕の居る場所はタフトだけには知らせて置くから、僕が歸らなければならぬ急用があつたならばタフトに、僕に直ぐ歸れと云ふことを言つて呉れ給へ。さうすれば直ぐに歸つて来る。それを君に話さうと思つて呼んだのだ」と云ふことであつた。それから三人寄つて話して居る中にルーズベルトは、

「僕は一寸公文に署名しなければならぬから失禮する」と言つてデスクの所に往つて署名をして居つた。其の間にタフトと私がストーブの前に立つて四方山の話をして居るとタフトがストーブの上の壁に掛けてある額を指して、

「此の額がコロラト州の山の中の繪だ。彼處にゾロ／＼歩き廻つて居るのが熊だ。大統領はあの熊を行ちに往くのだ」

「それぢやア僕は熊打ちは止せと大統領に勸告したい」
斯う言つた所が署名して居つたルーズベルトの耳に熊打ちは止せと云ふ聲が入つたのであらう、署名する手を止め私を顧みて、

「止めると云ふのはどう云ふ譯か」

「何故かと言へば君も知つて居るだらう。英吉利の徽章は獅子、亞米利加は鷲、

露西亞は熊である。其の露西亞の徽章たる熊を米國大統領の君が日露の戦役中に打ちに往くと云ふことは、穩當でない。取りも直ほさず露西亞を打つと云ふことになる。故に嚴正中立を標榜する大統領としては止した方が宜からうと思ふ

「僕は熊打ちよりも露西亞を打ちに往くのだ」

「それなら大賛成。どうか君が熊を澤山打つて来るやうに僕は祝福する」

と云ひたれば、ルーズベルトは曰く、

「僕がコロラドで澤山熊を打つたならば、今度来るロゼストウエンスキーの艦隊は日本の海軍の爲に打沈められる前兆だ。僕は澤山捕つて来るから待つて居給へ」

と言ふて別れた。それが三月二十日です。果せる哉後日即ち五月二十七日にはロ

ゼストウエンスキーの艦隊は日本海にてあの通りに潰滅した。

五月十八日まで待つてもロゼストウエンスキーがまだ日本の近海に來ぬ。ルーズベルトが一寸華盛頓で午餐を一緒にしようと言ふから私は往つた。いつもの通り最初は夫人や子供達と一緒に飯を食つて食事を終へた。所が、

「實は此間の熊狩の報告をしようと思つて招んだのだが、大きな熊を三頭、中小取交せて六頭、都合九頭捕つた」

「それは大成功だ」

「ロゼストウエンスキーも近々日本の近海に來る筈だが、日本の艦隊が之を打沈める吉兆は最早實現した」

「それなら僕は其の熊の皮を一枚其の記念に貰ひたい」

「折角だがそれは遣れない。僕は總て猛獸狩に往つて捕つたときの獲物は、親類